

日本人の見たギリシア (19世紀後半～20世紀半ば)

村田奈々子

ある一つの景観は、それを見る人の教養と、文化と、
職能を通じて、はじめて意義をもちうるにすぎない。
——サン＝テグジュペリ『人間の土地』(堀内大學訳)

はじめに

本稿では19世紀末から20世紀半ばにギリシアを旅した日本人の旅行記をとりあげる。彼らの旅行記のなかに現れるギリシアの姿を通して、日本人のギリシア認識の型を抽出することを試みる。

日本人の旅行者は、ギリシアに何を期待し、何をみて、どのように認識し、記述したのか。本稿では、政治家、建築家、教育家、歴史家、作家、物理学者と、異なる職業を持つ7人の日本人知識人の旅行記に焦点をあてる。彼らがギリシアを訪問した時期は19世紀後半から20世紀半ばまでとかなりの時間的幅がある。それにもかかわらず、彼らの旅行記の記述には共通するギリシア認識の型が見られる。また、彼らが身につけた文化的素養、職業の専門性に由来する興味関心から、個人に特有のモノの見方、感じ方も確認できる。

本稿の構成は以下のとおりである。第1章では、本稿で取り上げる7人の日本人——黒田清隆、伊東忠太、黒板勝美、安倍能成、竹山道雄、三島由紀夫、湯川秀樹——の略歴とそれぞれの旅の概要を記す。第2章では、日本人旅行者に共有する最も顕著なギリシア観——文明の源としての古代ギリシア——が、いつ頃からどのようなかたちで普及したのかを整理する。第3章から第5章までは、旅行記の具体的な記述を時間軸の視点から

分類し紹介する。第3章では古代ギリシアの中に留まる記述、第4章では古代ギリシアと同時代のギリシアを比較する記述、第5章では同時代のギリシアについての記述を扱う。第6章では、日本とギリシアを比較する記述を見ていく。第3章から第5章の時間軸の視点に対し、第6章は空間軸の視点からの分類である。各節で紹介する日本人旅行者の記述に関連して、当時のギリシアが置かれた政治・文化・社会状況を適宜補足する。

本稿は、上記の分類を7人の旅行記の記述に網羅的に当てはめようとするものではない。分類をするための視点は様々にありえる。本稿では試みに時間と空間という2つの軸で分類してみたまでである。日本におけるギリシア観を整理する試みは、近代日本の文化史、近代における日本人の精神史の一端を明らかにすることにつながるだろう。

1. ギリシアを旅した日本人

本稿でとりあげるギリシアを旅した7人の経歴とギリシア訪問の概略を見ていこう。

	日程／ギリシア滞在期間	紀行文から確認できる旅程（順不同、*はオスマン帝国領ではあるがギリシアの歴史と文化に関連する地域）
黒田清隆	1886年10月18日～10月26日	オスマン帝国（*コンスタンティノープル）—（海路）—ピレウス、アテネ—（海路）—イタリア（プリンディシ）
伊東忠太	1905年1月～2月	オスマン帝国（*コンスタンティノープル）—（海路）—ピレウス、アテネ、コリントス、ミケーネ、オリンピア、パトラス—（海路）—イタリア（プリンディシ）
黒板勝美	1908年から2年間の欧米旅行（ギリシア滞在期間は不明だが2週間程度）	イタリア（プリンディシ）—（海路）—パトラス、アテネ、ミケーネ、ティリンス、オリンピア、コリントス、デルフィ、（*スミルナ、*トロイ、*コンスタンティノープル）—エジプト
安倍能成	1925年2月1日～2月14日	イタリア（プリンディシ）—（海路）—ピレウス、アテネ、コリントス、ミケーネ、ナフプリオン—（海路）—イタリア（プリンディシ）
竹山道雄	1930年1月1日～（期間不明）	イタリア（プリンディシ）—（海路）—パトラス、コリントス、アテネ、キフィシア……（海路）—日本
三島由紀夫	1952年4月24日～4月29日	フランス（パリ）—（空路）—アテネ、デルフィ—イタリア（ローマ）
湯川秀樹	1964年5月末から2週間	日本—（空路）—アテネ、デルフィ、エーゲ海の島々（デロス、ミコнос、サントリーニ、ロードス、クレタ）—（空路）—日本

日本人旅行者の旅程とギリシアの訪問地

(1) 黒田清隆

黒田清隆(1840～1900)は、薩摩藩出身で維新時に活躍した人物である。明治政府では、政治家として北海道開拓使長官や農商務大臣などを務めた。1888年には伊藤博文に続いて内閣総理大臣となった¹。総理大臣就任の2年前、1886年6月23日から翌87年4月21日まで、黒田は約300日間にわたって欧米を旅した。長崎を出航し釜山を經由してロシア帝国のウラジオストクに入って西進し、最後はアメリカ西海岸のサンフランシスコから日本に戻るといって世界一周の大旅行だった。この旅での見聞を黒田は『環遊日記』(1887年)にまとめた。シベリアからロシア帝国に入った黒田は、ロシアを縦断してオスマン帝国に到達した。そこから彼はギリシアを訪れた(1886年10月18日～10月26日)²。

日本とギリシアとの正式な国交は1899年の修好友好通商条約の締結をもってはじまる。黒田はそれ以前にギリシアを訪れたことになる。とはいえ、黒田は頼るあてもなくギリシアを訪問したわけではないようだ。彼は、当時のギリシア首相兼国防大臣ハリラオス・トリクピス(1832～1896)、外務大臣ステファノス・ドラグミス(1842～1923)、そしてギリシア国王ゲオルギオス1世(1845～1913)と王妃オルガ(1851～1926)と面会している。黒田のギリシア訪問は、いわゆる物見遊山の「観光」というより、ギリシアの「国情視察」といった趣である。彼は、ギリシアの財政状況、産業の発展状況、特に軍事状況に強い関心を抱き、『環遊日記』に詳細な記録を残している。ギリシア人軍人の案内で、アテネとその近郊の軍事施設も見学している。ゲオルギオス1世は黒田に「希臘国救世主第一等勲章」を贈り、黒田からはギリシア王室へ日本の短剣、古漆器、香箱が献じられた³。黒田がギリシアを去る際には、国王と王妃が見送りのためアテネの外港であるピレウスまでわざわざ足を運んだ。このことから、正式の国交はなかったものの、彼が「国賓」待遇で手厚くもてなされたことが想像される。

(2) 伊東忠太

伊東忠太(1867~1954)は、平安神宮、明治神宮、築地本願寺を設計したことで知られる建築家・建築史家である。羽前国米沢(現在の山形県米沢市)に生まれた伊東は、1892年に帝国大学工科大学造家学科⁴(現在の東京大学工学部建築学科にあたる)を卒業した。その後は大学院に進学し日本建築史の研究をはじめた。1893年には、東京美術学校(現東京芸術大学)で講師を務めた。この時伊東は日本美術の研究に尽力した同校校長の岡倉天心の影響を受けたと言われる。1899年には東京帝国大学工科大学助教教授となる⁵。当時、教授に昇進するためには3年間の欧米への留学経験が必要とされた。しかし伊東は東洋への留学を強く望んだ。日本建築の源を学術的に明らかにするためには、中国・インドといった東洋の国々の建築を見る必要があると考えたからである。造家学科主任教授辰野金吾はこの申し出に困惑した。工科大学学長の古市公威も東洋への留学では文部省からの許可はおりまいと考えていた。それでも伊東はあきらめなかった。最終的には、欧米経由で帰国するという条件付きで、文部省から東洋の建築踏査旅行の許可を得た⁶。伊東の旅は1902年3月29日から1905年6月25/26日にまで及ぶ世界一周旅行となった⁷。旅先の伊東は、訪問先の建築物やその意匠のみならず眼前の風景や現地の人々をノートに詳細にスケッチし、部分的には彩色を施した。ユーモラスなイラストも含まれているこれらのノートは『野帳』と総称され、今日日本建築学会建築博物館のデジタルアーカイヴズですべて閲覧することができる⁸。

この大旅行の一部がギリシアへの訪問である。旅の終わりに近づいた1905年1月24日、伊東はオスマン帝国の首都イスタンブル(コンスタンティノープル)を出発しギリシアに向かった⁹。彼がギリシアに滞在したのは十数日間である。2月3日にはギリシアを発ってイタリアを目指した¹⁰。彼はギリシアでも建造物と意匠の詳細なスケッチを残している。伊東は、博士論文『法隆寺建築論』(1893年)で、法隆寺という建物の源泉はギリシアにあると主張した。法隆寺のギリシア式エンタシス(柱)と、玉虫厨子の忍冬唐草文様とギリシア建築の文様との類似がその証拠とされた。大

旅行の目的のひとつは、それを自らの目で確かめることにもあった。伊東は、ギリシアの首都アテネの中心部に位置したオリンピア・ゼウス神殿のエンタシス(柱)を複数個所採寸した図を残している。この図の下には「我が法隆寺ト全シdesignナリ」とのメモ書きが見られる。彼はほかの神殿のエンタシスも自分の目で見て検討した。さらにルネサンス期イタリア建築のエンタシスについても研究した。その結果得られた結論は、エンタシスはどの建築にも普遍的にみられるということだった。つまり、エンタシスの類似を根拠として法隆寺建築の起源はギリシアであるとは主張し得ないという、自らの説の否定であった¹¹。

専門である建築に対する興味は別として、ギリシアの旅は伊東に特別な印象を残したようである。彼は『野帳』のスケッチのほかに、この時のギリシア訪問の記録を「希臘旅行茶話」¹²という短い旅行記にまとめた。一方、このあとに訪問したイタリア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、カナダについての旅行記は書き残していない。いわゆるヨーロッパと称される地域について唯一独立したかたちで旅行記を書いたのがギリシアなのである。本稿ではこの「希臘旅行茶話」を取り上げる。

(3) 黒板勝美

黒板勝実(1874~1946)は、明治末期から第二次世界大戦前の日本のアカデミズム史学を代表する歴史家である。1896年帝国大学文科大学国史学科を卒業して大学院に進学し、東京帝国大学史料編纂員、同大学文科大学講師を経て、1906年に東京帝国大学教授兼史料編纂官に任命された。1919年には同大学教授となり、1935年に定年で退官する。実証主義に立脚した歴史家としての黒板の業績は、日本の古文書学を大成し、基礎史料の整備に尽力した点にある。黒板は文化財の保護の重要性を説き、博物館を整備し、史跡保存の根本的な方針を定めるという点でも功績を残した。しかし、この活動は黒板と国家との結びつきを強めた。黒板は、朝鮮総督府の『朝鮮史』編纂といった「植民史学」においても大きな役割を果たした。関東大震災後には、帝室博物館の復興事業にも携わった。こうした活動の結果、

黒板には日本国家の政治イデオロギーと強いつながりを持つ「国体史観」の主導者であるという評価が下されることにもなった¹³。

黒板は1908年から2年間、学術研究を目的として欧米を旅した。その時の記録は『西遊二年欧米文明記』¹⁴（1909年）にまとめられている。黒板の旅の目的は旅行記の小序に明確に述べられている。明治維新以降、西欧化を目指した日本は日露戦争に勝利し、欧米からも一目置かれる国家となった。しかしながら日本はまだ欧米に学ぶべきところがある。これまで欧米から取り入れたのは物質的な側面でしかなかった。今後学ぶべきは、表層的な物質的な豊かさではなく、欧米諸国が内包する精神的な側面であると、黒板は指摘するのである¹⁵。この旅行記の記述はこの姿勢に貫かれている。

黒板の旅は日本から東回りで、まずアメリカ西海岸のサンフランシスコに入り、そこから大陸を縦断してニューヨーク、ワシントンDC、ボストンをめぐり、イギリスを經由して大陸ヨーロッパに到達した。フランス、ドイツ、オーストリア・ハンガリー帝国から、オランダ、北欧、ロシアに至る。そこから南下してイタリア、そしてギリシアを訪問した。ギリシアからオスマン帝国に入り、最終目的地のエジプトから帰国の途についた。ギリシアの旅はこの大旅行のほとんど最後に位置づけられる。

『西遊二年欧米文明記』からは、黒板が訪問先の国々で多くの博物館を訪問したことがわかる。イタリアやギリシアでは遺跡や廃墟に興味を示し、ギリシアの発掘事業に並々ならぬ関心を示している。オスマン帝国領内のトロイ遺跡にもわざわざ足を運んでいる。のちに黒板の学問業績として評価される博物館の整備、史跡・文化財保存の重要性の認識は、この旅での経験を通して育まれ強化されたと言えるかもしれない。

（4）安倍能成

安倍能成（1883～1966）は、明治から昭和にかけて生きた哲学者、教育者である。東京帝国大学文科大学で哲学を学んだ安倍は、在学中に夏目漱石の知遇を得たことから、卒業後は文芸評論を発表することもあった。慶

應義塾講師、第一高等学校講師、法政大学講師を経たのち、1924年9月から1926年2月までヨーロッパに留学した。帰国後は京城帝国大学教授となり、第二次世界大戦中には第一高等学校校長を務めた。戦後は幣原喜重郎内閣の文部大臣として教育改革にあたった。さらに学習院院長も長く務めたことから皇室とも深い関係にあった¹⁶。戦後日本を訪れたアメリカ教育使節団に対し「戦勝国たるが故に正義と真実を枉げ」、「無用に傲慢ならざる」¹⁷ことがないよう文部大臣として要望したことに象徴されるように、思想的にはリベラルな人物だった。

本稿でとりあげるのは、上述のヨーロッパ留学の際にギリシアを旅行したときの記録である。安倍の留学は国費によるもので、留学先はイギリス、フランス、ドイツ、イタリアだった。彼はこれらの国々で大学の講義を受けるよりは、様々な場所を訪問することを心がけていたと述懐している。留学に与えられた短い期間をより有効に活用しようと考えたのであろう。彼は、スカンディナヴィア半島の国々とギリシアとを、当時有名な旅行案内書『ベデカー』を手に、特に熱心に見て歩いた。安倍がギリシアを旅したのは、1925年1月末から約2週間である。帰国後、その時の経験が雑誌『思想』¹⁸に発表された。さらに加筆の上『ギリシヤとスカンディナヴィア』（1933年）として出版されたのは帰国から7年後のことであった。

安倍によると、ギリシアでは古い文化遺跡を見学し、スカンディナヴィアでは自然の雄大さに接した。この旅行はもっぱら一人旅であり、名士と面会したり、学者と議論を交わすこともなかった。したがって彼は「黙せる傍観者」以上ではなかったことを認めている。素晴らしい景色や優れた芸術を見ても、誰かにその感激を語るわけではなく、ひとり静かにかみしめることを好んでいたと言う。この一人旅の寂しさをむしろ彼は楽しんだ¹⁹。

『ギリシヤとスカンディナヴィア』は、第二次世界大戦中の1941年、『藝術の國と自然の國』と改題されて再出版された。1941年6月24日の日付のある再版の序文で、彼は「東方のギリシヤは又ギリシヤで、英國から離れ得なかった爲に、忽ちドイツの電撃にまくし立てられ、〔中略〕今やアクロポリスの丘上には、恐らくハーケンクロイツの旗が翩翻とはためて居る

ことだろう』²⁰と記している。安倍の想像は間違っていなかった。この年の4月27日、ドイツ軍はアテネに入城した。アクロポリスの丘に翻っていたギリシア国旗に代わって、直ちにハーケンクロイツの旗が掲げられたのである。

(5) 竹山道雄

竹山道雄(1903～1984)は、昭和期のドイツ文学者・評論家である。1948年に出版された児童文学の傑作『ビルマの豎琴』の作者としても知られる。出生地は大阪であるが、父の仕事の関係で幼年期を朝鮮の京城で過ごした。第一高等学校を経て東京帝国大学文学部独文科を卒業。卒業後すぐに第一高等学校の講師となり、翌年(1927年)ヨーロッパ(ベルリン、パリ)に留学する。3年後の1930年、ギリシアを經由して日本に帰国した。第一高等学校の教授に昇進したのち、1940年校長として着任した安倍能成と知り合った。戦後の学制改革で第一高等学校が新制東京大学教養学部に変更された際は退職を考えたが、教養学部長矢内原忠雄が辞職を認めなかったため、1年間東京大学教授として勤めたのち、1951年職を辞した。以後彼は世界を旅しながら、主に執筆活動に力を注いだ。安倍能成との親交は1966年に安倍が亡くなるまでつづいた。

本稿で取り上げる『希臘にて』は、雑誌『世代』に1936年11月号から1941年5月号まで掲載された旅行記である²¹。実際のギリシアの旅から5年以上経過したのちの出版である。興味深いのは、3年間のヨーロッパ留学に関してとくにまとまった文章を残していないのに対して、ギリシアの旅についてはかなりまとまった分量の旅行記を発表している点である²²。竹山のギリシアへの特別な思いがうかがわれる。彼の旅行記からは、竹山が通りすがりのギリシア人との簡単な会話にはじまって、彼らの生活に深く入り込む様子がうかがわれる。ギリシア人との交流の濃密さが、竹山の旅行記の際立った特徴である。この旅行記は、単なる旅の記録を超えて、竹山の人間としての情感が溢れたひとつの抒情的な作品の域に達していて、読ませる内容である。

なお竹山はこの後1969年にヨーロッパを旅した際、トルコに足を延ばし、隣国ギリシアを再訪している。この時はトルコでの印象が中心となる「エーゲ海のほとり」と題したエッセイを雑誌『自由』に連載した²³。

(6) 三島由紀夫

三島由紀夫（1925～1970）は昭和期の作家である。東京で生まれ、高等学校まで学習院に在学した。学習院在学時から小説を執筆していたが、東京大学法学部卒業後は大蔵省に入省し10か月間勤務した。その後本格的に執筆活動に入り、1949年に発表した『仮面の告白』で作家としての地位を確立した²⁴。

1951年12月25日、三島は初の海外旅行に出発する。日本がまだアメリカの占領下であり、海外旅行が制限されていた時代である。三島は、朝日新聞社に勤める父の友人の仲立ちで、新聞社の特別通信員という資格で日本を出た。横浜港から船で出発し、アメリカ（ハワイ、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク、マイアミ）をまず訪問した。その後、プエルトリコから南米のブラジル（リオデジャネイロ、サンパウロ、リンス）に向かった。さらにヨーロッパへ足を延ばし、スイス（ジュネーブ）、フランス（パリ）、イギリス（ロンドン、ギルフォード）、ギリシア（アテネ、デルフィ）、イタリア（ローマ）を訪問したのち、帰路は飛行機で1952年5月10日に帰国した。4か月半に及んだ全行程の記録は、帰国後断片的に様々な雑誌に発表された。ギリシア旅行は「希臘・羅馬紀行」として『藝術新潮』に掲載されたのが初出である²⁵。同年、これらをまとめた『アポロの杯』が出版された。これほど多くの国や都市を訪れた旅行記のタイトルに、ギリシアの神の名を取って記したところに、彼のギリシアへの想いの強さが表れている。ただし、三島がなぜこのタイトルにしたかについて説明はない。全知全能の神ゼウスの息子であるアポロは、医術をはじめ、弓術、詩歌、音楽、預言、牧畜といった多岐にわたる領域の神である。三島はこのアポロの多様性から何を選び取ったのか。芸術の神としてなのか。あるいはニーチェの『悲劇の誕生』にみられる調和と秩序ある統一の

象徴なのか。私たちはさまざまに想像するしかない²⁶。

この大旅行で三島がギリシアに滞在したのは、1952年4月24日から29日までのわずか6日間である。首都アテネ以外に遠出をしたのは、神託で有名なデルフィのみである。トラベラーズチェックの詐欺被害に遭ったためパリ滞在が1か月半に及ぶということがなければ、ギリシアにももう少し長く逗留できたのかもしれない。『アポロの杯』全編を通して、ギリシアの旅の記録は、リオデジャネイロと並ぶクライマックスをかたちづくる²⁷。一般には、このギリシアの旅を通して三島は古典主義とギリシア的肉体への憧れを強め、やがて1954年に発表された小説『潮騒』に結実したと言われている²⁸。

（7）湯川秀樹

湯川秀樹（1907～1981）は、1949年日本人初のノーベル賞（物理学）を受賞した理論物理学者である。彼の受賞は敗戦後の混乱と貧困の中にいた日本人に大きな希望を与えたと言われる。若い研究者には大きな励みとなり、その後の日本の科学研究を発展させる契機ともなった。

湯川は1929年に京都帝国大学理学部を卒業した。大阪帝国大学助教授を経て、1940年に京都帝国大学教授に就任した。一時、東京帝国大学、プリンストン大学高等研究所、コロンビア大学等の教授も兼任した。1953年以降は定年まで京都大学基礎物理学研究所所長として研究活動をつづけた。その一方で湯川は、世界的なレベルでの平和活動に積極的に参加した。イギリスの哲学者バートランド・ラッセルとアメリカの物理学者アルベルト・アインシュタインが中心となり核兵器反対と平和的手段による紛争解決を訴えた1955年の宣言に名を連ねた。この宣言を契機に発足した、核兵器廃絶を訴えるパグウォッシュ会議には、1957年の初回以来頻繁に出席し、科学者による平和運動の中心的な人物となった²⁹。彼は人文学の素養も深く、専門の物理学以外についても数多くの文章を残している³⁰。

湯川がギリシアを訪問したのは1964年5月末から6月上旬までの約2週間である。この旅はギリシア王室の招待に応じたものだった。この年ギリ

シア王室は、世界の様々な地域から様々な専門分野の優れた学者をアテネに招いて、連続講演会「アテネの集い」を開催した。湯川は講演者のひとりとして招待されたのである。招待された外国人は5名——イギリスの神経生理学者エドガー・エイドリアン、アメリカの古代ギリシア研究者モーゼス・フィンリー、ドイツの物理学者ヴェルナー・ハイゼンベルク、スウェーデンの生化学者ウィルヘルム・ティセリウス、そして湯川——である。ギリシアからはアテネ大学の哲学教授イオアニス・セオドラコプロスが参加した。この6名が、アクロポリスを望むプニクスの丘の上で、国王コンスタンディノス2世臨席のもと毎夜ひとりずつ講演をおこなった。

湯川は講演第5日目（6月5日）を担当した。この日のアテネは風が強く、会場のスピーカーが倒れるほどだったという。湯川は原稿が飛ばないように気を使った³¹。講演タイトルは「科学的思考における直観と抽象」。講演は英語でおこなわれた。

湯川は、幼い頃から中国古典に親しんできたみずからの経験を述べると



「Ο Ἰάπων καθηγητής ΧΙΝΤΕΚΙ ΓΙΟΥΚΑΒΑ, κατά τὴν χθεσινὴν ἡμι-
λίαν τοῦ εἰς τὴν Πνὸα.

ギリシアの新聞『イ・カシメリニ』（1964年6月6日）に掲載された講演中の湯川秀樹

ころからはじめる。そのうえで、老子も荘子も自然や生に対して深い洞察をおこなっているが、古代ギリシアのレベルに達しなかったのはなぜなのだろうという問いを発する。どうしてピタゴラスやデモクリトスに匹敵するような天才を、古代中国は生まなかったのだろうか。湯川は、これらの問いに対し、古代ギリシア人が物事を抽象化する能力に非常に秀でていたことが理由のひとつであろうと指摘する。そこから話は当時の物理学研究の潮流に移る。物理学が抽象化を極端に重要視するのは良い兆候とは言えない。直観にも十分に配慮することが必要である。そうすることが、物理学において避けがたい抽象化を補完し、さらに研究を前進させることにつながるだろうと彼は結論づけるのである³²。講演は巧みに構成され、内容も決して難解なものではなかった。

講演後、彼は同行した妻とともにギリシア国内の旅を楽しんだ。残された文章で確認するかぎり、彼が訪問したのはデルフィ（6月7日）とエーゲ海の島々——デロス、ミコノス、サントリーニ、ロードス、クレタ——（6月8日～11日）である³³。湯川は、この旅の記録を旅行記としては出版していないが、旅をしながら考えたことをいくつかのエッセイで書き残している³⁴。

2. 文明の源としての古代ギリシア

ギリシアへの旅は、日本人にとっては時間をさかのぼる旅だった。彼らの記述のなかには、古代ギリシアに言及する箇所を必ずといっていいほど見出すことができる。古代ギリシアは、学問や芸術の瞠目すべき成果をあげた時代として、一様に賛美されている。古代ギリシアについてのこうした共通理解は、ヨーロッパの古代ギリシア崇拜（親ギリシア主義、Philhellenism）の影響を受けたものと考えられる。

「ヨーロッパ文明の源としての古代ギリシア」あるいは「全人類に時代を超えて影響を与え続ける学芸の淵源としての古代ギリシア」という見方が、いつごろの時期日本に伝わったのかは明らかでない。何らかの形で「古代ギリシアの知」に言及した日本の文献としては、嘉承年間（1120年以後）

の今昔物語集に収める「龜、鶴の教を信ぜずして地に落ち甲を破れる語」というイソップ物語に類似する物語が、最初期のものとして確認される。17世紀にはいると、諸種の『伊曾保（イソップ）物語』が出版されただけでなく、アリストテレスやプラトンといった古代ギリシアの哲学者からの引用を含んだ文献も見られるようになる。杉田玄白の『解體新書』が出された18世紀後半から19世紀以降は、ガレノスやヒポクラテスといった医学者への関心の高まりが出版状況から確認できる。特にヒポクラテスについての文献は枚挙にいとまがない。ヒポクラテスには及ばないが、アリストテレスやアレクサンドロス大王に関する文献も、幕末から明治期にはいると徐々に増加していく³⁵。

明治期の日本人のギリシアに関する知識に影響を与えたものとして『パーレー萬國史』として知られるPeter Parley's Universal Historyがあげられる。アメリカで出版・編集業を営むS.G.グッドリッジは、ピーター・パーレーの名を冠する様々な物語、歴史教科書、科学や博物学の案内書等を出版していた。それら「パーレーもの」のひとつが『パーレー萬國史』（1837年初版）である。邦訳された『萬國史』は一時歴史の教科書として使用され、明治期の日本国民の教養を形成したが、1890年代には使用されなくなる。一方原典の方は、英語の読みやすさと内容の面白さから、中級レベルの英語の教科書・副読本として、大正はじめにいたるまで学校や家庭で読み継がれた。したがって、明治期に英語を学んだ者であれば誰でも手にとる機会のある本だったといえる³⁶。

この『萬國史』において、古代ギリシア世界の記述はヨーロッパ史の冒頭を飾る。ギリシアの地への住民の定住から、立法者ソロン、リュクルゴスの登場、ペルシア戦争、アテネの黄金期とされるペリクレスの時代、ペロポネソス戦争、マケドニア王国とアレクサンドロス大王の東方遠征といった、今日の高等学校の世界史教科書とほぼ同じ（あるいはそれよりもいくぶん詳細な）一連の記述に加えて、ギリシア神話の神々やターレスやデモクリトスといった自然科学者、アリストテレス、ソクラテス、プラトンといった哲学者、ホメロス、ピンダロスといった詩人に言及した文化史

的記述にも十分なページを割いている。さらには、当時の食事といった社会史的な視点に立った章もある。アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニアといった地域ごとに全世界を対象にした700ページを超える通史全203章の、実に16章が古代ギリシア世界に充てられているのである³⁷。『萬國史』は、「ヨーロッパ=キリスト教世界」こそが人類の進歩の最先端に位置しているという19世紀的文明史観で貫かれている。これを読んだ明治の日本人たちは、ヨーロッパ文明揺籃の地としてのギリシアという位置づけをおのずと理解したことだろう。

このような状況をあわせ考えると、早ければ江戸時代末期、遅くとも明治20年(1888年)代までには、古代ギリシア発の学問・芸術そして国制のありかたが、近代ヨーロッパ世界の文明の基礎を形成したという認識が、日本の知識人のあいだで共有されていたと考えてよいだろう。福沢諭吉の『西洋事情』(慶應2年、1866年)で、西洋の学術について述べている箇所には「往古希臘の学一たび衰え、これを恢復したるものは亜刺伯人にて、……」³⁸とある。この記述は古代ギリシアで学問が興隆したことを前提としている。法律について述べる箇所では「各国にて法の形を成すに至る迄の順序は、甚だ遅々として殆んどその起源を知るべからず。年代の間には、世に人物の出でて法を論ずる者あり。即ちアデーネ〔アテネ：筆者注〕のソロン、スパルタのシコルグス〔リュクルゴス：筆者注〕、英国のアルフレットの如き、是なり。」³⁹と古代ギリシアの立法者の名前を筆頭にあげている。さらに、福沢諭吉の『世界国尽』(再版本、明治4年、1871年)にも「『伊太里国』の南より東へ渡り『希臘』は由来ひさしき国なれど今は風俗衰えて昔日の様のあとも見ず」⁴⁰と、古代に隆盛を誇ったギリシアの姿を記している。

福沢の記述から、ほんやりとうかがわれた古代ギリシアを評価する姿勢は、黒田清隆の旅行記『環遊日記』の中で、より明確なかたちで現れている。彼はギリシアの歴史の冒頭で「希臘ハ宇内ノ舊國ニシテ歐洲ノ文物典章皆淵源ヲ此地ニ發ス」⁴¹と記している。ここには、古代ギリシアが、ヨーロッパの学芸の源であるという認識がはっきり書かれている。このフィル

ヘレニズムの姿勢は、ギリシアを訪れた時期こそ異なっている、本稿で扱うすべての旅人に共通している。

例えば、黒田の旅から20年後にギリシアを訪れた黒板は以下のように述べている。

請ふ世界の地圖を繙け、アテーネ府は地中海岸に於ける一小国希臘中の一点、然りただ一點に過ぎぬ、併し精神界の地圖に於ては如何、誰か直ちに忌憚なくその範圍を劃し得るものぞ⁴²、

地理的には小国に過ぎないギリシアではあるが、古代ギリシアが生み出した文明は、狭小な地理的境界をはるかに超えて、人間精神に広く影響を与えていると説く。さらに、それから20年後の安倍能成の旅行記の冒頭には、こう記されている。

ヨーロッパ文化の發祥地、ヘラスの國の都アテナイを訪うて、子供の時から一種のあこがれを持つて居たアクロポリスの土を親しく踏んで見よう、といふのは、故國を立つて以來の私の願ひであつた⁴³。

さらに、黒田の旅から80年後にギリシアの地を踏んだ湯川秀樹も、感慨深げにこう語る。

私の専攻する物理学のような基礎科学の發祥の地であるギリシャ、二千数百年前に数多くの天才を生み出したギリシャ、その中心であったアテネ——それは私にとって一生に一度は訪問しなければならない土地であつた⁴⁴。

日本人の旅人にとって、ギリシアとはまずなによりも古代ギリシアであった。古代ギリシアが生み出した学問・芸術の成果ゆえに、知識人や文

化人にとって、ギリシアは訪れるべき憧憬の地とされたのである。三島由紀夫は、憧憬の思いをさらに強め、旅行記『アポロの杯』で「ギリシアは私の眷恋の地である」と述べている⁴⁵。

とはいえ、彼らが現実に目にしているのは同時代のギリシアであって、2000年以上隔たった古代ギリシアではない。それにもかかわらず、「古代ギリシア」は旅行者のギリシアを見る眼差しに、常に影を落としている。彼らは、ギリシアを旅する「今現在」と古代ギリシアという「過去」という二つの時間の間を、各自の旅の目的や各自の感性に応じて行ったり来たりしている。

日本人旅行者の旅行記の中の記述を、「過去」と「現在」という時間軸の視点から読むと、大きく三つに分類することができる。第一に、同時代のギリシアを全く無視して、古代ギリシアの中に留まる記述、第二に古代ギリシアと同時代のギリシアを比較しようとする記述——この記述はさらに、同時代のギリシアを古代からの「墮落」あるいは「退化」したものと思わず記述と、同時代に古代からの継続を認める記述に分類される——、第三に、同時代のギリシアそのものを見つめる記述、である。ひとりの旅行者の記述の中に、これら三つの要素が共存していることも稀ではない。第3節から第5節では、旅行者の記述をこの三つの分類に従って整理してみることにする。

3. 過去に留まる眼差し

目に映る現実の風景を見ながら、それでも古代ギリシアの時間のなかに留まろうとする記述として、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』と関連付けた言及が指摘できよう。たとえば、黒板勝美は以下のように記している。

ホーマーの詩オデッセーで名高いコルフの島に寄港し、身はこゝに希臘の人となつてなんとなく嬉しく、風物また自から異つて神仙の郷に入るが如き心地するに、〔後略〕⁴⁶

類似する例としては、安倍能成の『オデュッセイア』に関するより詳細な言及がある。

船はやがて右舷にイタカの島を見て、ケファレニヤ島との間のイタカ海峡に入った。二十餘年前に讀んだオディッセイは、イリアッドより話が纏つて居たせいか、いくらか多く記憶に残つて居る。こゝはオデュッセウスの支配した國かと思ふと、彼がありとあらゆる危険と困苦とを凌いでやつとこの島影を見出し得た時の歡喜、後のペネローペが毎日織つた機布を解きほぐしては言寄る若者を逃れ、夫の歸りを待つた心の切なさなどが、意外にまざまざと感ぜられて、或る意味に於て文學が歴史よりも眞實であることを、今更の如く考へさせられた⁴⁷。

黒板はイタリアから海路ギリシアを目指す旅の途中だった。安倍はギリシアに別れを告げ、海路イタリアに向かう途上だった。船上から目にしたコルフ島やイタカ島、ケファロニア島は、すぐさま自らが教養として身につけた西欧古典文学を想起させると同時に、ホメロスの文学への連想から、自分たちがギリシアに「入国」あるいは「出国」したことを実感する。ふたりは遡ってホメロスの物語の舞台とされた時間に引き込まれる。これらの島々で、今現在、どのような人々が、どのような暮らしを営んでいるのかといったことには一切関心を示さない。

黒板は、アテネに入りホテルの窓からアクロポリスの丘や、古代から大理石の産地として名高いペンデリの山を目にして「余はこゝにクラシックの人希臘全盛時代のアテネ人になつたのではあるまいかと思つた。」⁴⁸と悦にいつている。

安倍のホメロスへの時代への跳躍は、以下の箇所にも表れている。

[ナフプリヤに出る途中のアルゴスのヘライオン（ヘラ神殿）は] トロヤ出征のギリシヤ方の諸將が總指揮のアガメノンに忠誠を

誓った所だと言はれて、何か知ら色々なギジョンの浮んで来るのは、高等學校時代にホメロスのドイツ譯を讀んだお陰であらう⁴⁹。

このふたりと趣を異にするのは、竹山道雄である。彼がギリシア「入国」を実感したのは、ホメロスではなく、ラフカディオ・ハーン（1850～1904）からの連想である。

正午ごろレフカス島に近づいた。〔中略〕ここはラフカディオ・ハーンの故郷だという。うち見たところ波にうかぶ獣の死骸のようであった。船が東にすすむにしたがって風景は次第に物凄くなってきた。僕は心の中で、いよいよ希臘がはじまった、と思った⁵⁰。

竹山も、黒板や安倍と同様、イタリアから海路ギリシアに向かった。彼は、レフカス島を目にする前に、コルフ島やイタカ島を通過したはずである。知識人である竹山がホメロスとそれらの島々との関係を知らないはずはない。しかし、それらの島々、その島々が想起させるホメロスの物語には一切触れていない。前述のように竹山が記したギリシアの旅は、今・現在を生きる現地の人々との交流に彩られるのを特徴としている。ホメロスではなく、自分に近い時代を生きたハーンからギリシアを想起したのも、彼のギリシアへの眼差しがより現在に向かっていた証左であろう。

ギリシア国王の前で講演をおこなった湯川秀樹においても、思考する彼の眼差しは常に古代ギリシアに向っていたといつてよい。彼のギリシアへの旅の目的のひとつは、物理学をそもそもどこから学んだのか、ということ突き止めたいたいということにあった。湯川は17世紀の近代物理学の驚異的な発展は、古代ギリシアの自然科学者たちの学問的蓄積を足場にできたからだと考える。その意味で、17世紀の物理学者よりも、古代ギリシアの科学者のほうが優れていると主張する。しかし、この古代ギリシアの科学者たちは何を足場にしたのだろうか、ということ湯川は長年疑問に思っていたようだ⁵¹。

現実のギリシアに足を踏み入れて、彼はその答えを見つけた。彼は以下のように記す。

私たちの船が立寄ったのは、デロス島、ミコノス島、サントリーヌ島の三つの小さな島とロード島、クレタ島の二つの大きな島であった。デロス島で、白い大理石のライオンのならびたつ石ころ道を歩きながら、私の空想は自然と人間の関係が、ここに来た古代ギリシャ人によって、どのように把握されたであろうかという問題をめぐって発展していった。高い木は一本もなく、草もほとんど生えていないこの小さな島、すぐに上ってしまうことのできる小高い丘、それらを間近く取りかこんでいるのは、青い空であり、青い海である。繁茂する植物、出没する動物によってさまざまげられることなく、或はまた果てしない砂漠、雪をいただく大山脈によって圧倒されることもない。ここに来た古代のギリシャ人は、自然の単純さを人間に身近なものとして、また、人間的スケールに近いものとして体得することができたのではなかろうか……。〔中略〕

古代ギリシャの自然哲学者たちが万物の根源を水と考えたり地水火風と考えたりした時、生物の世界の多種多様性によって、彼等の心眼が曇らされることが少なかったのである。熱帯のジャングルに住む人たちの間から自然の単純性と法則性の洞察が生まれなかったのはむしろ当然であったろう⁵²。

つまり、ギリシアの自然環境が単純であったこと、人間がたやすくそれを認知できたこと——この等身大の自然環境こそが、科学を生み出した原動力だったと湯川は結論づけている。

湯川に見られる「人間に身近な」「人間的スケールに近い」世界としてのギリシアという見方は、三島のギリシア観にも通底している。三島は、ギリシアの次に訪れたイタリアのローマでコロセウムを見る。彼はそれに

感動しないばかりか、そもそも芸術品とすることが間違いであるという。ギリシアで目にした遺跡への賞賛とは正反対の評価である。彼は次のように書く。

希臘の精神は、日本ではあやまって「壮大な」精神と考えられている。そうではない。希臘は大きくて不完全なものよりも、小さくても完全なものの方を愛したのだ。過剰な精神性の創り出す怪物的な巨大な作品は希臘のあずかり知らぬところだった。彼らの国家さえ小さかった。羅馬は東方に及ぶその世界的版図の上に、メソポタミヤの文化以来一旦見失われていた東方の「壮大さ」の趣味を復活したのであったが、この趣味を、ほとんどそのまま基督教が継承したのは、理由のないことではない。彼らは羅馬の遺物のもっている過剰な質量を、過剰な精神を以てこれを埋めるべき妥当な器だと考えたにちがいない。かくて今なお旧教の総本山、羅馬では何もかもが大きい⁵³。

三島研究者の柴田勝次は、三島のこの「可視的な等身大の」古代ギリシア観は、古代オルフェウス教のような秘教的な側面を無視しており、あまりに明快な割り切りかたであると指摘する⁵⁴。しかしながら、物理学者の湯川と作家の三島の2人が、期せずして類似する古代ギリシア観を抱いた点は注目すべきであろう。

4. 比較の眼差し

(1) 古代から現代への継続を見る

安倍はしばしば、実際に目にしたギリシア人の行動を、古代ギリシア人の習慣や彼らの歴史と結びつけて解釈している。例えば、アテネの中心部に位置する国会議事堂の前に広がるシンタグマ広場周辺のカフェでくつろぎ会話を楽しむギリシア人の様子は、ソクラテスの時代からずっと続いていた伝統なのではないかと考えた。

ホテルは王宮に近いシュンタゴマトス廣場に臨んで、都の中央形勝の地にある。併し廣場の草も木もほこりにまみれて白つぼく、さうして手前の木のない所には椅子が一ぱいに並べられて、人々は砂塵の中に平気で何か飲んで居る。しかもよく見ると彼等はたいてい椅子を三つ占領して、一つには腰をかけ、一つには肘をつき、一つには足を投出し、時刻がまだ朝だとかいふことも忘れたやうに、悠然として傍人と語つたり、茫然として街頭を眺めたりして居る。西歐のカフェーの悠々ぶりよりは更に一層の悠々ぶりである。私はそれを見て、成程街頭を樂むといふことはソクラテス以來アテナイの傳統的習俗かな、と思つた⁵⁵。

安倍は、古代から現代への継続を、ホテルのレストランの給仕係の姿勢の中にも読み取る。

彼等〔ギリシア人給仕〕に通じた特色は、彼等が皿を運ぶ時、昂然として眞直な姿勢で濶歩することである。それは、昔の歴史家がペルシヤ人とギリシヤ人を比べて、ペルシヤ人の姿勢は前こゝみで服従の精神に富み、ギリシヤ人の姿勢は眞直であつて自由の精神に富む、といふ意味のことをいつた、という古い記憶を思出す位に、私には著しく感ぜられた⁵⁶。

さらに安倍は、ミケーネで宿泊した宿で出会った少女の名前にも古代の名残をかぎつけて想像を膨らませる。ここにも、安倍のホメロスへの傾斜が見てとれる。

〔ミュケナイの〕宿の娘は十七八位か、父親に似て色が黒いが、名はヘレネといつてトロヤ戦争の原因をなした美人と同じである。二人の弟の一人はアガメムノン、他は父アガメムノンの爲に姦夫姦婦に復仇したオレステスの名を背負つて居る。アガメムノ

ン一族に縁故の深いこの村にかういふ名のあるのは別に不思議でないが、やはりアイギストスと呼ぶ男の子、クリュタイムネストラと呼ぶ女の子などは居ないであらう。此等の娘達の外に近處の娘も來てダンスをやつたりした⁵⁷。

アテネのアクロポリスの丘の南斜面に位置するディオニソス劇場での出来事を、三島は、古代ギリシアの風習を持ち出して、半ば露悪的にこう記している。

ディオニューソス神の司祭の座席に腰を下ろして、私は虫の音を聞いた。さきほどから、どういふわけか十二、三の希臘の少年が私につきまとい離れない。彼はお金がほしいのであろうか、私の吸っている英国煙草がほしいのであろうか、あるいはまた、古代希臘の少年愛の伝習を私に教えるつもりなのだろうか。それなら私はもう知っている⁵⁸。

竹山の感覚は、他の旅行者とは少し異なる。彼は、古代を直ちに現代につなげようとはしない。彼は、ギリシアの古代と現代の間に中世ビザンツ帝国の時代があることを喚起する。竹山は、自分が目にした対象の中に、古代、中世、現代と、ギリシアが経験した歴史の歩みを確認するのである。

僕は古代希臘の壺の黒褐色の線画などで、肢体の硬い、ひずんだ平面的な人体の群像を見ると、しばしばビザンチンの形式的な絵を連想するのであったが、その感じは現在のアテネ市にもいたるところに見られた。ここには豊麗な力強い人間味に溢れた古代希臘の感じはすこしもなく、むしろ硬く乾いて瘠せた幾何学の図式のような印象に出会うのであった。行き交う女にも、たとえばトランプの絵姿のような、一寸意地わるそうな血の気のない表情が多かった。これがこの地味瘦せた半島のもつ表情かもしれない、

——としばしば感じた。

あのトランプの人像や模様はどういう系統からできあがったのであろうか。希臘、ビザンチン、アラビア——、そういうものが交じっているような気がする。いずれにしても、いまこの国にはこの三つのものが混じりあっているし、これがここの公的の様式らしく思われた⁵⁹。

竹山のこの記述では、そもそも古代ギリシア人の意識・精神のなかに、ビザンツ的な芸術作品を生み出す要素が内包されていたのではないかということが示唆されている。同時に、決して肥沃ではないバルカン半島に生き続けたギリシア人の表情は、古代彫刻の「力強い人間味に溢れた」ものとは異なって、実際は正教のイコンを彷彿させる「トランプの絵姿」のようなものだったのではないかと感じている。今日のギリシアについても「三つのものが混じりあっている」と記している。竹山は、自分が目にしているギリシアは、古代から直線的に現代につながるのではなく、中世ビザンツ、そしてイスラーム国家オスマン帝国による支配を経た姿であるということを実感している。

(2) 古代から現代への墮落・劣化を見る

旅行者の記述の中には、古代と現代を比較して、その間に優劣をつけようとする姿勢も見られる。その場合、優れているのは古代であり、劣っているのは現代であって、その逆の評価はない。

伊東は人種の観点から現代のギリシア人を以下のように評する。

希臘人は自分の國をエルラスと名けてゐるが、古代のヘラス人の種は今殆ど無くなつて、スラーヴ種やアルバニー種の血が混和してゐる。それであるから、今日の希臘人に古代のやうな美しい容貌骨格を有してゐるものはない⁶⁰。

そもそも現代のギリシア人は、古代ギリシア人の血を純粹に受け継いだ人々ではない。彼らには、スラヴ人やアルバニア人の血も混じっている。したがって、現代のギリシア人は人種としても古代ギリシア人と同じではない。彼らの容姿も、古代ギリシア人のそれとは異なっていて、美しくはないと言うのである。古代ギリシア人が実際にどういう姿かたちをしていたのかは、誰にもわからない。伊東は、残されている古代ギリシアの均齊のとれた人体の彫像を、古代ギリシア人の姿をそのまま写し取ったものと理解しているようだ。

一方、黒田は、伊東とは反対の見解を記している。

言語上ヨリ論スレハ希臘國人は「ヘリーン」民族ナリ「アルバニヤ」人ハ四百年以后希臘國內ニ遷徙シタルモノニシテ漸次「ヘリーン」民族ニ風化セシモノナリ⁶¹

ここでは、移住してきたアルバニア人が「ヘリーン」民族、すなわちギリシア人に徐々に同化した（アルバニア人の血は「風化」した）と説明している。それは、ギリシア人の血には時を経ても雑多な要素が入り込むことはなかったということを暗に示唆している。現代のギリシア人は古代ギリシア人の純粹な子孫であるという見方である。

伊東の見解にみられるような、近代以降のギリシア人と古代ギリシア人との間に人種的な結びつきを認める見方を真向から否定する説を最初に唱えたのはオーストリアの歴史学者ヤコブ・フィリップ・ファルメライヤー（1790～1861）である。1830年代から1860年代にかけて、ファルメライヤーは、この説を主張する多くの著作を発表したり、講演をおこなったりした。ファルメライヤーの主張によると、紀元5世紀から6世紀に、ギリシアの地にスラヴ系の人々が侵入した結果、民族的にも、文化的にも古代ギリシアのあらゆる痕跡は消し去られてしまったという。また、のちにアルバニア系の人々がこの地に定住したことも、近代ギリシア人の形成に大きな影響を及ぼしたという。さらにファルメライヤーは、近代のギリシア人はヨー

ロッパ人のカテゴリーにすら属しないと唱えたのである。彼の説によると、古代世界以降のギリシア人はスラヴ系やアルバニア人の血をひく民族だということになる。この考え方は、オスマン帝国から独立してギリシアという近代独立国家を形成して以降、古代ギリシアと近代ギリシアとの紐帯を事あるごとに強調してきた近代ギリシア人のアイデンティティを、根本から揺るがすこととなった。ギリシアでは彼の本は発禁となった。さらに、19世紀から20世紀初頭にかけて、歴史学や民俗学（ラオグラフィア／λαογραφία）といった学問領域で、この説を否定する研究が次々と出された⁶²。

このファルメライヤーの説が、なんらかの経路で日本（の少なくとも知識人の間）に流布していたということになるのだろうか⁶³。黒田の説明がファルメライヤーの説と正反対なのは、ギリシア滞在中に彼が説明を受けたのが、すべてギリシア人の政治家や軍人だったからかもしれない。彼らは、まさにファルメライヤーの説を反駁すべき立場の人間だった。

安倍も伊東と同様に、現代のギリシア人は古代ギリシア人とは人種上異なっているという見方を受け入れている。古代ギリシア人とは違うのだから、現代のギリシア人がパルテノン神殿が歴史上どれだけ偉大な遺産であるのか思い思うことはない。現代のアテネの人々は神殿のまわりで、穏やか、かつ無邪気に過ごしている。

パルテノンはその北側も西側も圓柱のドラムやそのほかの断片に
充ち充ち（原文踊り字）て居る。今のアテナイの市民達は、昔の
アテナイの市民の残したこの廢墟の断片に思ひ思ひ（原文踊り字）
に腰をかけて、ほかほか（原文踊り字）煙草をふかしたり、互に
談笑したりして居る。彼等の子供は又子供で唱歌を歌つたり、石
の下で何か捜し物をしたりして居る。彼等はいかうして彼等の祖先
の過去の偉大と彼らの現在の貧弱とを比べて思ひ煩ふこともな
く、現前の麗しい日と青い空とを樂んで居るのであらう。尤も祖
先といつても現在のギリシヤ人は、人種上嚴密には昔のギリシヤ

人の子孫といへないであらうが⁶⁴。

安倍はさらに、アテネの郊外にあって古代に秘儀が行われていたことで知られるエレウシスで出会った子供たちを「アルバニア人」と記している。

エレウシスは今は熱病の多い荒村で、その住民の多くはアルバニア人だといふが、昔は三大悲劇詩人の一人アイスキュロスを生み、その「エレウシスの密儀」と呼ばれたる、穀物果實の女神デメテル（ケレス）、その娘ベルセフォネ（コーレ）及びディオニュソスの祭儀は、ギリシヤの昔から紀元後四世紀までも厳かに修せられた。〔中略〕町の近くには例によって絲杉、橄欖が散點して、聖路は白くアテナイに向つて通じて居る。アルバニア人の子であらうか、澤山の子供が神殿の附近で遊んで居た⁶⁵。

人種の問題はさておき、安倍は、現代のギリシヤ人たちが古代の遺跡をぞんざいに扱っているありさまをみて、祖先とされる古代ギリシヤ人への敬意が欠如していることに半ばあきれている様子である。安倍は、当時アテネに在住していた日本人のK君と、ある日アテネ近郊を散歩する機会を持った。

K君を誘ひ出して、昔のアカデメイヤの跡を見ようと郊外を歩いたが、要領を得ないで歸る。ソフォクレスの居たコロノス（Kolonos）も捜したが分らなかった。總じて今のギリシヤ人に昔のえらい先祖を慕ふ心さへもないことは、こんな偉人の跡をそこいらの誰も知らないので分る⁶⁶。

さらに安倍は、ギリシヤの前に訪れていたイタリアで目にした遺跡保護の状況と「観光資本」としての遺跡の活用策と比べて、ギリシヤが「自分たちの歴史」に無知、無関心なことを指摘する。そして、このことが国力の

弱さに結びついているのではないかと考える⁶⁷。

イタリアでは到る處古跡を食ひものにして居るといふ感じがしたが、ギリシヤでは古跡を食ひものにすらして居ない。古跡に對する手入や管理の行届き方の差異は非常なものである。さすがにイタリアは強國だと思はざるを得ない⁶⁸。

安倍は、ギリシアは無知・無関心ゆえに観光に力を入れていないと見ていたが、竹山は、アテネ郊外のキフィシアの食堂で眼にした奇妙な土産物について触れている。

土産物用と思われる細工物がおいてあった。これは希臘では珍しいことだった。一体になげやりで、その古跡を利用して金もうけをすることすらしめないこの国で、この山の中の町〔キフィシア〕だけに、こんな外国人向きの料理店や土産物があるのはふしぎだった。〔中略〕しかもこの品が奇抜だった。——石膏細工の女の乳房が数種類並べてあったのである⁶⁹。

これを読むと、ギリシアもまったく観光に興味がなかったわけではなさそうである。

古代遺跡の扱いに関連して、黒板と安倍は、エルギン・マーブルに言及している。エルギン・マーブルとは、19世紀のはじめ、イスタンブル駐在のイギリス大使第七代エルギン卿（1766～1841）がイギリスに持ち去ったパルテノン神殿をはじめとするアクロポリスの丘の建築物・彫刻の大理石群のことである。それらは今日まで大英博物館に展示されている⁷⁰。

黒板は以下のように記している。

無論今日霧深き倫敦の中央にあつて容易に千古の傑作を研究するを得るは學界のため喜ぶべきことであらう、またエルギン卿によ

つてこの絶品の散亡を豫防出来たかも知れぬ、されど若し舊のまゝにこのアクロポリスの上、崇巖なるドリア式の建築と共に之を観ることを得たならば、フィディアスの靈腕神工更に數段の光彩を加ふることであらうと、余は幾たびか神殿を仰ぎ観るのであつた⁷¹。

安倍は次のように述べる。

東の前廊は一番單純であつて、六本のイオニヤ式圓柱を列ねて居るが、その北隅の一本を例のエルギンがイギリスへ引抜いて行つたと聞くと、よし彼にアクロポリスの遺寶保存の功績を許しても。その無慙な遺方を憎まずには居られない⁷²。

黒板と安倍に共通するのは、遺跡保護の視点からすれば、ギリシアにあるよりもイギリスで手厚く管理されたほうが好ましく、エルギンの功績は容認されるという見方である。しかしながら、作品を環境から無理やり引き離したその手法には遺憾とすべきところが残る⁷³。

古代ギリシアの偉業について、現代のギリシア人は實際ほとんど興味を示さず、遺跡を保護・管理する意識すらない。その一方で、アテネの中心部は、古代ギリシア風の建物——新古典主義の建築——で溢れていた。安倍はその光景に手厳しい意見を述べる。

ディピュロンからオモニヤの廣場まで出て、その附近の大學、アカデメイア學士院、圖書館、議事堂等現代の建物を見る。何れも外構へは皆ギリシア式の建物であつて、大學の破風には哲學、文藝等に關係のある三群の壁畫があり、學士院の正面にはアテナとアポロとの大理石像がある。けれどもこはれてもほんとうの物を數見た眼には、それ等が何か博覽會の建物でものやうに淺薄である⁷⁴。

伊東は、現代ギリシアがヨーロッパの文明化の過程から完全に脱落している点を指摘している。しかし、オスマン帝国を訪れたあとギリシアに入った伊東の見方は、イタリア経由の安倍のそれとは異なっている。伊東は、オスマン帝国とギリシアを比較した場合、ギリシアのほうが各段に進歩しているとみる。また、現代のギリシア人が古代を模範として、これに学ぼうとする姿勢は認めており、古代の遺物に頼って生き延びることはできるであろうと評している。

今日の希臘人は既に世の文明に後れて、最早追ひ付くことが出来ない境遇にをると私は思ふのである。〔中略〕尤も土耳其人に比べれば、兎に角一步も二歩も進んでをるには相違ない。彼等が二千年前にもつてゐた藝術はみな忘れられたやうに見える。彼等は今日美しい繪畫も彫刻も製作することが出来ない。美しい建物も造る事が出来ない。しかし古代の遺品を模範として兎に角勉強してをるから、新機軸は出せなくとも糟粕だけは嘗めていけるであらう⁷⁵。

黒板は、今日でも交通の便が決してよいとはいえない古代のオリンピック競技会の開催地オリンピアまで足を延ばした。彼は古代オリンピックについてだけでなく、彼のギリシア訪問時から数えて12、3年前に開催された第一回近代オリンピックにも批判的に言及している。

オリムピアの祭典はかくて希臘の歴史はじまつて以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連続した、その事蹟は希臘の文化と共に永久に亡びることがないであらう、近頃歐洲にこのオリムピア競技が復興されたのもこれがためである、たゞその名のみにして實の合はざるを遺憾とする⁷⁶。

ここに「實の合はざる」と指摘しているのは、「健全なる肉體に健全なる

精神宿る』⁷⁷という古代ギリシアにおける教育のモットーのことである。これが日本における第一回近代オリンピックに対する一般的評価だったのかもしれない。黒板はこれに続いて、日本においてはオリンピック競技会のようなものは必要ないとする一方、日本の「體育會が近年振るはざるはなぜであらう」と自問する。いささか突飛な発想であるが、オリンピアの遺跡を歩きながら思い至った結論は、伊勢神宮にスタジアムを建設するというものだった。

各階級を通じ、各地方を通じ、擧つてその選士を出して龍驤虎撃の壯快なる競技を演じ、これを観るものもまた全國到るところより雲集する一のスツデイオンを有せざるは明治盛世の一大遺憾ではなからうか、[中略]余に天來の聲があつた『我が國民の崇敬し信仰する伊勢神宮に一大スツデイオンを建て、その大祭日に全國民の競技を演ぜしめよ』と⁷⁸。

黒板は、世界規模ではなく、全日本規模での競技会の開催を夢見た。この3年後の1912年に開催されたストックホルム大会で、日本は初めてオリンピックに参加した。

竹山のギリシアを見る目は独特である。彼は、「死」や「荒廢」をその中に認める。それは裏を返せば、繁榮する輝かしい古代ギリシアの幻影を心に抱きながら、それとの比較で目の前のギリシアを見る眼差しでもある。竹山の旅行記には、そのような例は枚挙にいとまがない。竹山の「亡びの想念」とでも特徴づけられる記述を以下に引用する。

目がさめるとすぐに頭に浮かんだのは、一昨日パトラスの港に上陸して以来接したこの国の荒廢のさまだった。その印象ははげしかった。——ここには何かおそろしいものがある。異様なものがある。すべてはうち砕かれ、埋没し、くつがえされ、焦げて亡んでいる。ここはヨーロッパの続きというよりも、むしろアフリカ

の続きに近い。いたるところに壮大な非情な破壊のみがある。月の世界の表面もかくやと思われるような場面もいくつか見た。その中に人が生きている。ささやかな石の家の中に、かれらは何をして生きているのだろうか。この景観は、僕が抱いていた希臘という観念とはあまりにもちがっている。あの豊かに麗しい古典希臘とはまさに正反対のものである。〔中略〕

このすさまじい印象は、この国に滞在中、片時も僕の念裏を離れないものだった。どこへ行っても何を見ても、一切の感ずること考えることの中に、荒廃ということが結びついた。そうして、これほどにも亡びうるということは、謎のように僕を悩ませた⁷⁹。

豚の目に化さざらんがために⁸⁰、僕はつねに目をみはって歩いたが、しかしこの国の旅は肉体的には楽ではなかった。孤独と長い旅の辛勞から、しまいにはずいぶん疲れてしまった。しかし、疲れながらもつねに昂奮していた。その昂奮は、いつも、この不可思議な死滅の国が自分の生きていることの謎を、あまりにももの凄く、大きく、そうしてうつくしく映し示していることから来るのであった⁸¹。

それから希臘の煙草を吸った。これも美味かった。青い煙は肺を浸して、焼けはじめた朝の大气の中に融けていった。僕はひとりごとした。

「この希臘は何もかも崩れて滅んで消えてゆきつつあるような国だが、香料だけは不思議によい！」⁸¹

しかし、この川の汚れていることはどうであろう！ 飛び石が不規則に並んで彼我の岸をつないでいたが、そのあたりには錆びたブリキの缶、新聞紙、硝子屑、そんなものがつまってぶつかりあいながら揺れていた。鼠の死骸も腸を出して浮いていた。〔中略〕

ここはいかなる古典的な感じもなかった。僕の頭の中で浮んでいた『ファイドロス』のイリソス川とは何の似たところもなかった。あたりはただの貧しい郊外の一角で、意味もない路傍で、いかなる風景ともいえなかった。僕は佇んであたりを見まわして、自然はいつからこのように変貌したのだろう、と怪しんだ⁸³。

アクロポリス！——僕はぞっとした。生れてはじめてこれを見た。僕は乾いた空気の中をじっと凝視した。〔売春婦のジブシー〕女はなお僕をゆすぶった。「アクロポリス！」——そうして僕をその方に引いて行こうとする。

あの岩山に僕を連れて行って、洞窟の中へでも入ろうというのであろうか。跟いて行ったら、僕もこの女もろとも、岩の面の浮彫にでもなってしまうのだろうか。そうして、この希臘の国の一切の事物と同じように、荒廃と死との中に不変の生命をあらわして、無限に長い時間のあいだをじっと動かずにいるのではなからうか⁸⁴。

〔ディオニゾス劇場の大理石の椅子に〕豹が浮彫にしてあった。この豹を見て僕はおどろいた。うすく融けた象牙色の石の膚の中に、豹はしなやかに軀幹をのぼし、首を後ろにふりむけ、瞳をきらきらさせて頭の上の葡萄の房を眺めていた。——生きていた。——国中がすべて墓場のようなこの希臘で、この豹だけが石の中に封じ込められたまま、熱いあらい呼吸をおし殺している。そうして、ここに数千年の時間が過ぎてゆき、これらの石の上を日が昇ったり、夜が翳ったりしているのであった⁸⁵。

希臘に来てから、僕はよく「生と死」の想念にとらわれた。この荒廃した山河は僕をくるしめた。あまりの死滅は僕をいらだたせた。そしてしきりに生きたものに接したかった。しかし答えるも

のはなかった。一切が崩れて疲れて焼け焦げて、半ば沙漠の国だった。ここには喜びもなく悲しみもない⁸⁶。

最終的に竹山は、ギリシアで見出した「死」と「荒廢」から、自らの日々の生活や生き方、さらには人間全般の生涯に思いをめぐらすにいたる。

アテネに来て幾日もさまよっているあいだに、僕の心の底に湧いてきた、一つの満足だった。

この旅からは、自分は得たものがあつた——、と僕は思った。〔中略〕僕もこの国を歩いて、平常の生活とはちがって何かあるいいがたき観念を具現した領域に足を踏み入れた。

ここでは、すべて生きたものは死んでいて、死んだものが生きている。人間も獣も木も、生きているものには命がない。建物や石塊や断礎や、死んだものはいきいきしている。〔中略〕考えてみよ、おまえの生活すら、実はこのような荒廢に取り巻かれているのではないか。おまえが見たり味わったり知ったりするすべてのものは、所詮はこのような虚無に懸った虹に似たようなものだ。おまえが死んだ後の世界は、いつかはこのような姿と化してしづかに亡びてゆくと思うがよい。いな、おまえが生きているその日その日が、その中にこのようなすさまじさを蔵しているのだ。お前の生存の鏡の裏には、このようなものが映っているのだ……。

このような世界の中にさすらうことは、僕の心をおののかせたが、また解放した。僕の心は毎日ときほぐれていった。むかしこの土地に住んでいた人間は、かれらの生命を石の中に鑄りこみ封じてここを去って行ったのであったが、僕はそういう遺された石の上に坐ったり臥したりしながら、かれらの生命が下からいきかえって伝わってくるのを感じた。そうして、生きているということは荒廢と重なり合って、それにつつまれながらそれを蔵してい

るものだという事を知った。それは刻々に死の方にむかってすすみつつあるのではなく、むしろ常時死に裏づけられているものなることを思った。われらの生涯とて、所詮はこの国の示すところのものにひとしい。われらの生活もこの国の人々のそれにひとしい。われらは生きながら死んでいる。死にながら生きている。ただときどき、一面の荒廃の中のところどころに封じこめられてある生命がいきかえって伝わってくるのを感じるので。自分を焼き自分を蘇えらせるものに触れて、この不可思議の永遠の中にしばらく自分が存在することをさとして戦慄するのだ……。

この希臘の旅はこの戦慄をもっとも妨げなく味わせてくれた。僕は自然のあいだを自由にあるいた。僕は死滅した廢墟の中を、こころ楽しみながら彷徨した⁸⁷。

「ここでは、すべて生きたものは死んでいて、死んだものが生きている。」この竹山のギリシアに対する印象から想起されるのは、フランス作家シャトーブリアン(1768～1848)の『パリからエルサレムへの旅程 (Itinéraire de Paris à Jérusalem)』である。シャトーブリアンは、本稿で取り上げた日本人旅行者たちより1世紀以上前、1806年7月パリを出て8月、イタリアのトリエステから海路でギリシアに入った。その後、ロードス島、エルサレム、カルタゴ、そしてアレクサンドリアといった古典古代とキリスト教にとって主要な地を訪問し、1807年にパリに帰還した。旅行記は1811年に初版が発表された。本のタイトルが示しているとおり、旅の最終目的地がギリシアだったわけではないし、1年にわたる旅のうち、ギリシアで過ごしたのはわずか19日間である。しかしながら、旅行記全体の3分の1以上がギリシアの旅の記録で占められている⁸⁸。

当時のヨーロッパの親ギリシア主義の風潮のなかで教養を身につけたシャトーブリアンにとって、ギリシアの地を訪れることは大きな喜びであった。しかしながら、現実のギリシアは彼の期待とは大きくかけ離れていた。シャトーブリアンは、ギリシア各地で自分たちの歴史に無知なギリ

シア人に出会い、憤ると同時に大きく幻滅する⁸⁹。彼が目にするギリシア人は、墮落してしまった怠惰で無知な人々でしかない。現実のギリシアを歩きつつシャトーブリアンが思い描くのは、18世紀ドイツの美術史家ヴィンケルマン（1717～1768）が理想化した古代ギリシアの光景であった。彼は、古代ギリシアの死者と対話をしながら旅をしている。彼自身、旅の目的をきかれて「人々に出会うため、特に死んでしまったギリシア人に出会うため」と答えて、質問者を驚かせている⁹⁰。したがって、旅の途中で現実のギリシア人に話しかけられて、彼自身の古代の幻影がかき消されることを彼はひどく嫌った⁹¹。彼はギリシア旅行を総括して以下のように述べる。

文明化したヨーロッパをめぐることで満足する旅行者は、実に幸せだ。かつて名を轟かせたこの国に入り込むことがないからだ。ここでは一歩進むごとに、心が萎える。大理石や石の遺跡に注意を向けていても、常に、生きた遺跡の姿にはとなる。ギリシアでは夢に浸ろうとしても無駄だ。悲しい現実が追いかけてくる⁹²。

ヨーロッパ文明の淵源としての古代ギリシアへの期待が大きかっただけに、シャトーブリアンの幻滅と悲しみは深い。遺跡は古代の偉大さを伝えてはいるものの、彼が「生きた遺跡」と表現する同時代のギリシア人の墮落を、彼は許すことができない。シャトーブリアンにしてみれば、生きるしかばねと化したギリシア人が何世紀にもわたってイスラーム教徒に支配されているのも当然のことで、ギリシアがオスマン帝国から独立するということは考えられないことだった⁹³。

シャトーブリアンの予想に反して、その20数年後にギリシアは独立国家となった。竹山をはじめ、本稿の日本人旅行者たちはその独立国家ギリシアを旅している。古代と現代を比較し、シャトーブリアン同様、同時代のギリシア人の墮落を指摘する記述も確かにみられる。しかしながら、日本

人旅行者の筆致はシャトーブリアンほど非難や悲しみに満ちたものではない。彼らは淡々と目の前のギリシアやギリシア人について印象を記している。この違いはどこからくるのか。それはおそらく、フランス人シャトーブリアンが、ギリシアを「自分たちの一部」として考え、現実のギリシアもヨーロッパ「文明」の一部で「あらねばならない」と考えていたのに対して、日本人は、そのような意識から自由であったことに由来するのであろう。日本人旅行者、とくに竹山は、ギリシア文明の盛衰を前にシャトーブリアンよりも一層距離を置いた眼差しで向かい合うことができたのではないか。竹山は、ギリシアの盛衰と人間の生死を重ね合わせ、生と死がいかに近い関係にあるのかを実感し、満足し、心を解き放ってすらいる。

ギリシアの廃墟から、「亡びることによって生きる」という生と死の連関を感じ取ったのは三島も同様である。彼はアテネの古代遺跡の廃墟を目にして、廃墟の美とはどういう種類の美なのか自問する。そして以下のような解答を与えている。

希臘人の考えた美の方法は、生を再編成することである。自然を再組織することである。ポオル・ヴァレリイも「秩序とは偉大な反自然的企劃である」と言っている。廃墟は、偶然にも、希臘人の考えたような不死の美を、希臘人自身のこの^{いま}絆しめから解放したのだ。

アクロポリスのいたるところに、われわれは〔中略〕吹きめぐる希臘の風に乗って、^{はばた}羽搏いている翼を感じる。（これこそは希臘の風である！ 私の頬を打ち、^{じだ}耳朶を打っているこの風こそは）

それらの翼は、廃墟の失われた部分に生えたのである。残された廃墟は石である。失われた部分において、人間が翼を得たのだ。ここからこそ、人間が羽搏いたのだ。

絆しめをのがれた生が、神々の見えざる肉体を獲て、羽搏いているさまを、われわれはアクロポリスの青空のそこかしこに見る。大理石のあいだから、真紅の罌粟が花をひらき、野生の麦や

芒が風になびいている。ここの小神殿のニケが翼をもたなかったのは、偶然ではない。その木造の翼なきニケ像は失われた。つまり彼女は翼を得たのだ。⁹⁴

古代ギリシア人は、自然に手を加えて美を生み出し、その秩序だった美を永遠のものにしようとした。しかし三島は、秩序ある美が崩れさり廃墟と化した、その失われた部分に「翼」、つまり「生」を見て美しいと感じる。古代ギリシア人が考えていたかたちとは異なるものの、それが不死の美だと考えるのである。

5. 同時代を見つめる眼差し

日本人旅行者は、古代ギリシアから離れて、同時代の「あるがままの」ギリシアにも目をむけている。彼らの記述は大きく三つに分類される。第一に、ギリシアの自然環境について、第二にギリシアの街の様子や人々のふるまい、ギリシア人と交わした会話について、第三にギリシア国内の政治・社会・文化状況や国際社会の中のギリシアについてである。

(1) ギリシアの自然環境

ギリシアの自然については、まずは地中海性気候のギリシアの太陽の強い日差し、湿度の低さ、そして青い空といったステレオタイプの描写がある。ギリシアの太陽と空の青さは、旅人に好印象を与えている。安倍は以下のように記している。

まことにアテナイを歩いて見ると、日光は貧しい者をも富める者と平等に豊かに照して居ることを感ずる。汚い陋巷を通つても、よその國の貧民窟に見られるやうな無氣味な陰濕がないのは、そのせいであらう⁹⁵。

バルテノン神殿の背景をなす空の、三島による描写はいくぶん詩的である。

空の絶妙の青さは廃墟にとって必須のものである。もしパルテノンの円柱のあいだにこの空の代りに北欧のどんよりした空を置いてみれば、効果はおそらく半減するだろう。あまりその効果が著しいので、こうした青空は、廃墟のために予め用意されその残酷な青い静謐は、トルコの軍隊によって破壊された神殿の運命を、予見していたかのようにさえ思われる⁹⁶。

なお、パルテノン神殿はトルコ（オスマン帝国）の軍隊によって破壊されたのではなく、オスマン軍とヴェネチア軍との戦いで、ヴェネチア軍によって1687年に破壊された。三島の文章は事実誤認を含む⁹⁷。

三島はギリシアの太陽にも言及している。

今日も絶妙の青空。絶妙の風。夥しい光。……そうだ、希臘の日光は温和の度をこえて、あまりに露わであまりに夥しい。私はこういう光りと風を心から愛する。私が巴里をきらい、印象派を好まないのは、その温和な適度の日光に拠る。

むしろ、これは亜熱帯の光りである⁹⁸。

湯川はアテネの空港に到着して、市内に移動する車窓から初めてギリシアを見た際の印象を、自然の描写からはじめている。

一片の雲もなく青い空、それよりも一層青い海、京都の東山のようになだらかな丘陵——しかし緑の木立におおわれた山ではなく、ところどころに低い木が植えられているだけで、白い岩肌に見える丘陵——それらに前後上下から囲まれて、横に遠くまでひろがるアテネの町——白い大理石の建物、白ペンキで塗られた家々——はじめて見るアテネは予想以上に美しかった⁹⁹。

とはいえ、ギリシアの乾いた気候はいいことづくめではない。街は土埃

に覆われていた。安倍は土埃に繰り返し言及している。

汽車を下りてホテルまでの途中、日曜で店のしまつた市中はひっそりとして居たが、街路のほこりのひどいことは聞いたよりも以上であつた¹⁰⁰。

ずっと眺めた景色が、イタリヤの町の明るさにカイロの町の黄濁を加味したやうな、熱帯的な所がある。これは恐らく土が乾き過ぎて、樹が割合に乏しく、ほこりがひどいせいであらう¹⁰¹。

竹山は、青い空や日光には言及していない。そのかわりに、彼はギリシアの虹を毎日目にして好印象を抱いたようである。

僕の滞在中に、虹はほとんど毎日のように見られた。これが現在の希臘で唯一の新鮮な爽やかな感じをあたえるものだった¹⁰²。

竹山の訪問は冬の1月である。ギリシアでは比較的降水量が多い時期にあたるため、虹を見る機会が多かったということであろうか。

ステレオタイプの描写の他に際立って多い自然描写は、荒涼としたギリシアの風景についてである。ギリシアといえば、海を連想しがちであるが、実際は山がちな国である。その山が木々の緑をたたえたものではないところが、荒野の印象を強めている。安倍は以下のように述べる。

ミュケナイに至るまで、殆ど山ばかりの中に所々緑の麥畑を點ずる景色は雄大で立派ではあるが、「國亡びて山河あり」といふ荒寥の感は消し難い¹⁰³。

竹山は、ギリシアの自然の中に花が少ないことに気づいた。

僕は希臘が花のすくない国であるのに気がついておどろいた。古代の希臘の美術にも花の役割はきわめて貧しい。この国は人間と石との国である。僕は古代希臘に無いものを考えてみた。——そして、それは自然である、と考えて、自分でもふしぎな結論だと思った¹⁰⁴。

三島も緑の少ない、石だらけのギリシアについて言及している。

私の見た希臘の自然の概況を伝えるには、殆んど日本の河原のような夥しい石を想像してもらわなければならない。耕地は少なく、石だらけの荒蕪の地と、石だらけの牧場がつらなる彼方に、褐色のなだらかな山々を見るのみである。彩りといえば、ところどころにある罌粟畑と石のあいだに咲き競って黄や白や赤や紫の小さい野生の花だけで、緑は松や、アテーナゆかりの樹、橄欖のほかには、さほど鮮やかな緑を見ない。松はいたるところにある。多くは低いずんぐりした松である¹⁰⁵。

竹山は、ギリシアの荒涼とした自然と都市の景観という二者の関係から、以下のような記述を残している。

希臘の国の自然はいたるところ、大洪水か大火事の後のように荒涼としている。それもはじめから荒蕪の村であったのではなくて、異常な天変地異によってすべて破壊された後、そのままに打ち棄てられてあるような感じがする。〔中略〕アテネも、その喧騒と埃にもかかわらず、この自然にすこしの生氣をも与えていない。古い東邦の風物の中に浸みわたってゆく西欧風の風俗——それはこの市にも見られるが、しかし、いたるところに無智と倦怠と無気力が抜きがたく支配している。すべては卑少消耗の感じに覆われている。ただその中であって、海と神殿だけが燦然とかつ

毅然と目をそばだたしている¹⁰⁶。

(2) ギリシアの街、人々のふるまい

旅行者は、古代の遺跡について数多く言及しているが、同時代の建築物についての記述はきわめて少ない。その数少ない例のひとつが、第1回近代オリンピック開催時につくられたアテネの中心部にあるスタジアムについての安倍の記述である。

今のスタディオンは、アレクサンドリヤに住むギリシヤ人の一富豪の寄附によつて、全體大理石を用ゐて舊位置に舊規模を守つて復舊されたものである。昔の廢墟のみが見るに足り、新しい造營に何の見るべきものもない今のアテナイに、昔のものゝ復舊とはいへかういふものゝあるのは、珍しく人の目を引く。けれどもK君の話によると、アテナイ人がこのスタディオンを利用することはきわめて少いさうである¹⁰⁷。

アレクサンドリアに住むギリシヤ人富豪とは、ゲオルギオス・アヴェロフ(1818~1899)である。彼はオリンピックのメイン会場となるパンアテナイア・スタジアムを、古代様式そのままに再建するという壮大な計画に莫大な資金を提供した。近代のギリシヤ国家は貧しかったが、国外で活躍するギリシヤ人のなかには、商業で成功して一大財産を築くギリシヤ人がいた。そのなかに自分の財産を生まれ故郷あるいは国家に寄付しようとする人物がたびたび現れた。国家への貢献が著しい人物は「国民の恩人(εθνικός ευεργέτης)」と称されて讃えられた。アヴェロフもそのような「恩人」のひとりである¹⁰⁸。

安倍と竹山は、同時代のギリシヤの街や田舎の情景や人々について、他の旅行者よりも比較的多くの記述を残している。二人は、現地のギリシヤ人と英語もしくはフランス語で会話を交わしてもいる。安倍と竹山ほどではないが、三島も短期間のギリシヤ滞在の中で、同時代のギリシヤの様子

に触れ、心温まる交流をしたことがうかがわれる。

ギリシアの街の印象として、まず挙げられるのが不潔さである。ギリシア人のだらしない性質に由来すると彼らは考えている。

安倍は、馬の死骸が横たわっているアテネの泥の道についてこう述べる。

手入のしていない泥の深い道をぐるぐる（原文踊り字）とまはつて歩く。日本のやうに雨が多い國だつたら、こんな道はとても歩けたものではない。馬の死骸がそこいらに投出してあつて、犬がたかつて肉を食つて居る。ギリシヤ人が如何にだらしないか考へられる¹⁰⁹。

動物の死骸が打ち棄てられている光景は、安倍の5年後にギリシアを訪れた竹山も目撃している。

ある路傍で驢馬の死骸が横たわっていた。犬でも食ったのか脇腹が空洞になっていたが、片づけもしないでほうってあった¹¹⁰。

ギリシアがオスマン帝国に支配されていた19世紀はじめにギリシアの地を訪れたヨーロッパ人の旅行記にも、路上の動物の死骸についての記述は散見する。それから1世紀を経て、新古典主義の建物が立ち並ぶようになった首都アテネでも、社会の衛生観念には大きな変化は見られなかったと言えるのかもしれない。

ところで、ギリシア人のだらしないさを指摘する安倍ではあるが、今日的視点から見ると図らずもみずから「だらしない」行いをしている。

やがて立上つてそこいらを歩く。小用を足さうと思つても、それに適当な物陰がない。K君が「ギリシヤには陰がない」といつた詞は、なるほど眞理だなと感心した¹¹¹。

竹山も安倍と同様、ギリシアの不潔さに言及している。竹山はアテネのテセウス神殿近辺の様子を以下のように書いている。

テゼウスの神殿はほとんど完全に残っているドリアの建物であるが、今は内陣にも、入口にも、石柱のあいだの闕にも、貧民や安物売がごろ寝をしたり坐ったりして、不潔で、入るのが躊躇された。——そしてそこまで行くと、襤褸を着た乞食が二人、大声をあげて笑っていた¹¹²。

安倍は、旅行案内書『ベデカー』を手にギリシアをめぐるにいた。『ベデカー』では、「清潔であること」はギリシア的ではないと認識されていたようである¹¹³。安倍は、ペロポネソス半島の北東にある、アルゴスのナフプリオが予想に反して清潔であったため、以下のように記している。

〔ナフプリヤの〕市街もベデカーの所謂「非ギリシヤ的清潔」を持つて居り、道端に小川の流れて居るのも珍しく嬉しい。ホテルも相當なものであるが、便所は甚だ汚い¹¹⁴。

安倍とは約30年の時間差があるものの、三島はギリシアの清潔について述べている。デルフィの遺跡を見たあとホテルで一泊した早朝の描写である。

ホテル・カスターリアは、小ぢんまりした清潔な宿である。食事は殊によく、紐育以来久々に私が対面する、好物のヨーグルトをデザートに供した。食後、散歩に出る。町は暗く、往来の人の顔も見えないほど、灯火がすくない。そのため、軒のあいだから望むイテアの湊の灯が、ひときわ美しい¹¹⁵。

三島は、ホテルの食事も気に入ったようである。かなり濃厚な口あたり

のギリシア・ヨーグルトも問題なく食している。食事がまずいと記す安倍¹¹⁶と、この点でも対照的である。日本人の食生活の変化が影響を与えているのかもしれない。

伊東はギリシア人の衛生観念の欠如や騒ぎ立てるふるまいを短所としてあげる一方で、彼らの長所も見出している。ギリシア人が外国人からは概して評判がよくないことに同情している。

汽車中で希臘人が痰を床の上へ吐き散らすのは悪い癖である。又或る所で賤しげな十人ばかりの一行と乗り合せたが、彼等は何か大聲で唄ひ始め、下車する迄唄ひ続けてゐたが餘り宜しくない慣習である。それから國が小さいのと貧乏なとで一般に度量が小さい。頗る物にコセコセ（原文踊り字）する性質もある様に見受けた。併しながら概して人間は善良で温厚であるやうである。外國人に對しても親切であるやうだが、一般に希臘人の評判の甚だよくないのは氣の毒である¹¹⁷。

乗り物についての記述からは、「近代化」の發展途上にある当時のギリシアの様子が生き生きと浮かび上がる。まずは自転車である。

初めてアテナイに著いて先づこゝ〔テセイオンからアクロポリス一帯〕を訪うた時に、造花をつけた自転車が澤山走つてゐるのを見て、自転車の競走會かと思つたのであるが、後でK君にそれが貸自転車の標だといふことを教へられた¹¹⁸。

自転車に乗った人たちが回遊している地域から推測すると、この貸し自転車は観光客用のものだったのではないだろうか。造花が添えてあると言う点からも、ギリシア人が日常的に使用していたようには思われぬ。

安倍は、バスについても書いている。

乗合自動車に乗る。切符賣は日本の子供のやうに髪を短く刈つた、汚れた服を著た十三四歳の少年である。車中にロンドンの商店の廣告がある。後から聞くと車はロンドンから買つて來たお古ださうだ。併しその廣告までそのまゝにして居る物臭さが現代ギリシヤ式なのかも知れない¹¹⁹。

これとほとんど同じ光景に竹山も出くわす。

バスに乗った。車体の塗りは剥げて汚れていた。〔中略〕バスの中に貼つてある廣告はみな英語だった。〔中略〕このバスはロンドンを走っていたのであった。その古物がそのまま廣告も剥がさずにいまアテネを走っている。僕はいまさらのように希臘人のだらしなさに呆れて、向いに坐っている禿頭の男を見て嘲るようにひとりで笑つた¹²⁰。

1920年代後半から1930年代初めアテネを走っていたバスは、ロンドンのバスの中古車であつたことがうかがわれる。車体の外側を塗り替へることもせず、ロンドンの店名の入つた廣告を剥がす手間もかけないギリシア人の物臭さに、安倍も竹山も呆れているようではあるが、非難するような口調ではない。むしろそれが今のギリシアらしさだと受け取っている。

バスについての描写は、三島の旅行記にもある。安倍と竹山はアテネ市内を走るバスについて述べているが、三島は、1950年代のアテネから古代ギリシアを代表する聖域であるデルフィに向かう長距離バスでの経験を綴っている。

ところでデルフィまで五、六時間の行程は、出発間もなくエンジンに起きた故障のおかげで、延々十時間を要することになった。バスは何度故障を起しても、また執拗に動き出し、しまいには十ヤアド乃至二十ヤアドおきに止るのであつた。大した勾配ではな

いが止るたびに車はずるずると後戻りをする。と髭を蓄えた助手が大儀そうに車を下りて、大きな石を抱えて来て、滑り止めのためにこれをタイヤのうしろに据える。この原始的な儀式が際限もなく繰り返されたのち、どうした加減か、エンジンは急に立直り、薄暮のころデルフィに到着することができたので、翌日早朝の出発を控えているわれわれは、暗くなるまでの間、忽々の見学をしたのであった¹²¹。

1990年代には、私自身長距離バスでギリシアを広く旅した。それより40年も前の三島の経験がそっくりそのまま私の経験と重なる。三島の乗ったバスも、西ヨーロッパ諸国で走っていた中古バスだったに違いない。頻繁に故障が起こるだけでなく、クッションのない固い座席に座って長時間難儀な旅を続ける三島の姿が容易に想像できる。ギリシアに新品の長距離バスがお目見えしたのは、私の記憶するかぎり2004年のアテネ・オリンピック開催前後のことだったよう思う。

頻繁に中断される長旅ではあったが、三島は不満を口にしない。彼はむしろ、この道中で知り会ったギリシア人の子供とつかの間の交流を楽しんでいる。

かれらは二人とも十二歳で、快活で、利巧そうで、日本の子供のように学校がきらいでない。イムペリアル・ミッション・スクールに通っており、バスケット・ボールが好きで「古橋」の名を知っている。かれらは私の案内書の略図に山と河の名を書き入れてくれた。同じ年頃の私には、日本地図に利根川の気儘な曲線を書き入れることは、到底できない芸当であった。バスの出発の合図があったので、かれらはバスのほうにかけ出した。私がおくれていくと、一人がふりかえって、「Run, please!」と叫んだ。何という奇妙な、可愛らしい英語であろう！¹²²

ギリシア人の人懐っこさがうかがえる部分である。ギリシア人の「フィロクセニア (φιλοξένια)」——外国人 (よそ者) を歓待する姿勢——が存分に発揮されている場面でもある。ギリシアのような小国では、外国語の運用能力次第で将来の職業選択の幅が広がりもすれば狭まりもする。三島がギリシアを訪れた1950年代は、第二次世界大戦から続いたギリシア内戦が終了したばかりで、国は疲弊していた。多くのギリシア人が生きるために国を離れ、生きるためにアメリカやオーストラリアに移住した時期でもある。困窮する社会状況を微塵も感じさせない、この子供たちと三島のやりとりは心温まるものである。ギリシアの子供たちは、三島が問いもしないのに、英語で学校のことを語ったのだろう。三島が日本人と知り、三島を喜ばせようと彼らの知識を総動員して、知るかぎりの日本人の名前をあげたのだろう。それが、当時「フジヤマのトビウオ」と世界的に評判となった古橋廣之進の名だった。

安倍はアメリカ帰りのギリシア人と直接会話を交わしている。

その〔ヘライオン〕邊で逢つた一人の男、身體の頑丈な男が、我々に話かけてジャパニースか、イングリッシュを話すか、といふ。K君は彼が「イエス」といふ所を「シューア」(sure—I am sure—)といふことから、彼をカリフォルニア歸りの移民だと斷じ、アメリカの移民制限は歐洲人にも及び、ギリシヤでも歸國者の多いことを語つた。K君が彼に談判して荷馬車を備ふことにし、先づ近くのアマリーといふ村のカフェーで遅い午餐をする。そこには村の人が十數人も集つて居たが、今一人のカリフォルニア歸りが、以前の男と共に先づその中の物知りらしかつた。そこで黒パン、コーヒを取る。彼等は我々に酒を薦めて、勘定となると、It belongs to meといつて人には拂はせまいとする、さうして又大きなパンを持つて行けといふ。私はかねてベデカーで「二人もしくはそれ以上の仲間と一緒に酒やコーヒを飲む時、その中の一人が皆の爲に拂ひをするといふのが動かすべからざる習慣である。旅

人はかくして土地の人からの厚意を受けねばならなくなり、それを拒絶することは殆ど出来ない。それ故に旅人は彼の「復讐^{レヴェンヂ}」を同様の機会まで延すか、若しくは仲間の爲に酒を注文して直ぐに給仕人に拂ふかしなければならない」とあつたのを讀んで居たし、又彼に對して持つべき「復讐」の機会のないことを考へて、強いてそれを拂つた。私の旅中で拂ひを仲間と争つて居るのを見たのは、この外にはイタリヤの汽車の中だけであつた。かういふ風なホスピタリティーを見せる國民の品性が、必しも勝れて正直だといへないことは勿論である¹²³。

ここで述べられている「アメリカの移民制限」というのは、1924年にアメリカで南東欧からの移民を対象に出された移民制限法を意味しているものと思われる¹²⁴。19世紀末から20世紀はじめにかけて、ギリシアも含めた南東欧の貧しい国々から豊かさを求めてアメリカに移動する人々が激増した。その大半が独身の男性だった。南欧系の人々は「新移民」と呼ばれ、それまで主流だった西ヨーロッパからの「旧移民」とは異なる「ヨーロッパの滓」として差別された。彼らは、アメリカ社会の底辺の労働力を形成してアメリカ経済を支えた。しかし、新移民に雇用を奪われることを恐れたアングロ・サクソン系が主流のアメリカは、1920年代にその制限に踏み切った¹²⁵。安倍が出会ったのは、新移民としてアメリカに渡って戻ってきたギリシア人だったのだろう。ただし、このギリシア人の「フィロクセニア」を安倍は素直に受け入れようとしていない。旅行案内書を熟読したせいもあるが、日本人の律儀さが勝って、ごちそうになることを断固として拒否している。当のギリシア人は不可解に思っただろう。

安倍の律儀さは、彼が正教会の修道院を訪問した際の交流を振り返っているときにも見てとれる。

〔ナフプリヤ近郊の尼院ハギヤ・モネは〕一一四九年の創立だといふが、寺の建築もいふに足らず、その裝飾なども幼稚なもので

ある。〔中略〕

尼さんは自分の部屋に我々を請じて、果物の砂糖煮とコーヒとをもてなしてくれた。尼さんは五十を越えて居たであらう。もう肉の悩みは脱したやうな朗さと無邪氣さを持つて居た。彼女は自分のファンタジーの中ではジャポンは天國だといひ、私に向つてヴォートル・ギザージュあなたの顔付はギリシヤ人に似て居るといひ、別れの握手をする時には、「ヨルダンの彼方で、ヴラボー」といつた。彼女は私に歸國したらどうか日本の繪葉書を送つてくれといひ、私はそれを承諾した。彼女がその爲に書いてくれたアドレスは、私の手帳に今も残つて居るが、私はこの稿を書きつゝ、彼女との約を今に果さぬ怠慢を心苦しく思つた。ヨーロッパの旅の中でかうしたかりそめの約束をした人が四五人はある。さうして私は何れにもまだ約束を果して居ない。彼等は或は私を通じて日本人は約束を守らぬ國民だと思つて居るかも知れないと思ふと、一つ奮發して書かなくてはと思ふ¹²⁶。

「ジャポン」という表現からみて、安倍は修道女とフランス語で会話をしたのだろう。ここでは、安倍は修道女の「フィロクセニア」を受け入れている。会話からは修道女が日本に好印象を抱いていることが察せられる。安倍は彼女との約束をいまだ果さずにいることを恥じている。彼ひとりの怠慢のために、日本人の印象が悪くなることをおそれている。安倍は日本人であることに誇りを抱き、修道女が日本に好意的なことに満足気であった。

日本人鼻根のギリシヤ人の態度は、ちょうど日露戦争中にギリシヤを旅した伊東の体験にも反映されている。

出立の際宿帳に記名した後始めて日本人と知るや否や、大に驚いて私に罪を謝し、なぜ早く日本人だと名乗って下さらなかつたかと恨を述べたのである。彼は壁に掛けてある希臘國王及び皇后の

像を指して「皇后陛下はご承知の通り、露國から嫁せられたので、我々は實は本意なく思つております。露は姻戚の名の下に隠然我が國に干渉して種々の害毒を加へつゝあるのです。今貴國が露を取控いて下さるので實に雀躍に堪へません」と云つて眞實面に現はれてゐた¹²⁷。

安倍は、アルゴスで葬列に遭遇し、それに列していた正教会の聖職者に中国人と間違われたことに憤慨している。

〔アルゴスの〕街頭で一つの葬列に逢つたが、列の中のギリシヤ教の坊主は我々の方を見つゝ、不謹慎にも傍人にシネーゼ、シネーゼなどといつて居た。死者を棺にも入れず、死體をそのまゝに板に載せて居たのが異様であつた。その側で一人の男が御詠歌のやうなものをうたつて居た¹²⁸。

上述の例に見られるように、ギリシアにおける日本のイメージは概して好意的なものだった。19世紀末から20世紀はじめには、東洋の野蛮な一小國が急速な西欧化を遂げているとの情報はギリシアにも届いていた。日露戦争で、大国ロシアに日本が勝利すると、ギリシアの恨みを日本が果たしてくれたと日本を賞賛する声が相次いだ¹²⁹。当時、ギリシアは、バルカン半島に残されたオスマン帝国領をめぐるブルガリアやセルビアといった近隣スラブ諸國と対立していた。スラブ諸國を支援するパンスラヴ主義の首魁ロシアは、ギリシアの天敵だったからである。日露戦争後、「日本人党」と呼ばれた改革を目指す政党がギリシア議會に誕生したことも、ギリシアにおける日本の好印象を裏づけている。一方、当時のギリシアで中国は「後進性」と「怠惰」を象徴する國と認識されていた。とはいえ、一般のギリシア人が日本人と中国人を外見から區別することは難しかったであろう。竹山も「中国人」とからかわれた体験を綴っている。

ある路次を通ると、少年が五、六人遊んでいたが、考えこんで歩いている僕の方を見て、たがいに囁きあった。「チノ」とか「キノ」とかいう声が聞こえた。その前を行きすぎて気になるので振りかえったとき、僕は敷石の凹みに踵を入れてよろめいた。すると少年の群れからは、待ちかまえていたような意地のわるい歓呼の声があがった。僕が遠ざかるにしたがって、背後の嘲笑の声は高まった¹³⁰。

ところで、正教会の聖職者との出会いに関しては、伊東と正教会の世界総主教との面会を挙げておく必要があるだろう。世界総主教とは、オスマン帝国の首都イスタンブル（コンスタンティノーブル）に置かれた正教会の世界総主教座の最高指導者である。古代キリスト教時代の五本山以来の伝統を持つ。伊東は、ギリシア入国前にイスタンブルで世界総主教と面会した記録を残している。彼によると、総主教は日本でキリスト教が盛んでないと聞き不満気であったという¹³¹。彼が面会したのは、ヨアキム3世（1834～1912）と考えられる。一介の旅行者が、正教会の最高指導者と面会できるのは今日でも当時でも非常に珍しかったはずである。どういう手段で面会を果たしたのか、その経緯は明らかではない。

珍しい出会いと言え、竹山はロマの女性と出会った。場所はアテネのイリソス川の近辺。古代のイリソス川は水をたたえていた。竹山にとっては、高等学校時代に読んだプラトンの『ファイドロス』のなかで、川からの涼しい風の中で、蟬の声をききつつ、ソクラテスがファイドロスと共に愛について語った印象的な場所として記憶されていた。ところが、実際彼が目にしたイリソス川は汚れており、「錆びたブリキの缶、新聞紙、硝子屑がぶつかりあいながら揺れて」いるばかりか「鼠の死骸も腸を出して浮いていた。」そこに若い女が登場する。竹山はすぐにロマだと気づく。彼女はギリシア語で話しかけ、身振り手振りで竹山に何かを伝えようとしている。

その言葉はほとんど一言も分らないながら、僕はこの若いジブシー¹³²女の要求をさとった。彼女の唇からは僕の知っている希臘語、クセノドケイ（宿屋）という語が漏れた。彼女は旅人に身を委ねて金に換えようというのである。これがジブシーなのであろう。あらあらしい不潔な強健な、そして美しい女たち、こういうひとびとのあいだでは、こんなことは普通な事なのであろう。

女は酒を飲む真似をして手をだした。僕は小銭をあたえた。彼女はよろこんでさらに僕を誘った。言葉の通じないのをもどかしがりながら、その意をしらせようといろいろな猥らな恰好をして見せる。そうして僕の腕を掴んでひっぱって、遠くを指して叫んだ。「アクロポリス！ アクロポリス！」¹³³

果たして竹山がはじめてアクロポリスの神殿を見たのは、このロマの売春婦の導きによってだった。女性は竹山を離さず、アクロポリスのほうへ連れて行こうとする。竹山は、岩山の洞窟の中に連れ込まれるのではないかと思う。しまいには女を歌を歌い出し、踊りだして竹山の気を引こうとする。ロマの男の姿が見えて、この猥雑だが魅惑的で幻想的な場面は終わる。竹山は小銭を投げ与えて女を振り切る。女は蔑んだ喚き声をあげながら去って行った。

竹山の旅行記は、他の旅行者のそれと比較すると、単なる旅の記録に留まらず、多少創作を織り交ぜたのではないかと疑われるほど物語性に富んでいる。このロマの売春婦との一件がひとつの例である。竹山の感受性の豊かさが、彼が見るもの、出会う人々の描写に反映されているのかもしれない。

とはいえ竹山には、ギリシアを出国するにあたり、現実のギリシア人と下世話なやりとりを強いられる場面もあった。出国税として役所で80ドラクマの印紙を要求された彼は、印紙を買いに売店に向かう。売店の主人は150ドラクマの印紙を買えと言う。抵抗したあげく80ドラクマ分の印紙だけ買って役所に戻ると、役人は印紙の値段が下がっているから、さらに70

ドラクマ印紙が必要だと言って、出国に必要な手続きをしようとしな
し。しかたなく竹山は売店で70ドラクマの印紙を追加購入した。売店の主人と
役人がつながっていると見抜いた竹山は、店主に向って腹立たし気にこう
言う。

「一体おまえと役人とは結託しているのだらう！ 役人はお前の
ところで煙草を買わせ、お前は役人に切手を余計に買わしている
んだらう！」〔中略〕

「収入印紙の価格が下がっているなんて、何のことだか訳が分ら
ん。——だがおよそ」〔中略〕「楽しいことをするには税を払わにゃ
ならん。人生はそういうものだ。C'est la vie. 〔中略〕このいやな
国を出ていくという楽しみに対しては、多少の税はやむをえんか
もしれん……」¹³⁴

彼は憤りつつ役所に戻った。すると、そこではイギリス人が居丈高にギリ
シア人役人を叱りつけている。竹山に高圧的だった役人は今は小さくなっ
ている。竹山の手続きは問題なくすすんだ。部屋を出るとき、背後で「イ
ギリス人は中国人とはちがう——」¹³⁵という声が聞こえた。竹山は、一度
は腹をたてたギリシア人役人に同情する気持ちになった。いわゆる西欧人
が人を見下す態度を、竹山は憎々しく感じたのであろう。

ギリシアの街の描写として今日でも変わらないのは、カフェで人々がく
つろぐのんびりとした雰囲気だろう。安倍の旅行記からはそのようなギリ
シア人の生活が浮び上がる。

到る處のカフェーの閑々ぶりは固より、街路の側に馬車を休め
て、その上に踞つて居るもの、その車に一つの足をかけて荷車の
主と話して居るもの等、亂雑な喧噪の中に悠々たる長閑さがあ
る¹³⁶。

海岸の所々にあるカフェーは、天日の下に椅子を並べ、そこに黒く人のかたまりが見え、どこからか笛の音が聞こえて来る。私も一つの小さな出崎に置いてある椅子に休んだ。私の下には崖の段々があつて、その所々に休んで居る人々の帽子だけが見える。直ぐ近くの所には六十ばかりの身なりの見苦しくない人が、卓の側に坐り、日光を背に浴びて、顔は日に酔つたやうに赤く、今一つの椅子に肘をついて瞑目して居る。それが時々ものうく眼を見開いたかと思ふと、卓上のオレンジをつまんで口へ持つて行く。實に天下太平の圖である¹³⁷。

安倍もついカフェでくつろぐギリシア人の真似をしたくなる。

私もギリシヤ人並に粉の舌に觸るコーヒを注文して、それを一口飲んで水を飲んだり、二つのオレンジをむいてゆつくり食つたり、何を眺めるともなく、風は稍々冷いが日のかげることない雰圍氣の中に浸ること一時間ばかりであつた。南京豆を入れた小さな籠を下げた男が六人も七人も側を過ぎた。これもやはりカフェーの客を相手の商賣である。こんな海岸にもやはり羊がまごまご（原文踊り字）して居る¹³⁸。

安倍は、ギリシアを去る前にもういちどアクロポリス近辺を散歩する。以前目にした造花のついた自転車が回遊している。人々はのんびりと日光浴に興じている。

今日もその花自転車が四五臺遊弋して居るのを見て、今のアテナイの文化の程度が分るやうな氣がした。テセイオンの前には例によつてつくねんとして日光浴をして居る連中が多い¹³⁹。

のんびりとした、一見したところ「天下太平の国」ギリシア——このイメー

ジはギリシアを一面的にしかとらえていない。ただしギリシアが貧しい南東欧の小国に過ぎないこともまた事実であった。靴磨きで日銭を稼ごうと客を奪い合うギリシア人の姿を、安倍と竹山は記している。

〔アテナイの〕宿に歸る途中名物の靴磨に靴を磨かせる。老人と若者とが私を争つたが、老人に花を持たせてやつた¹⁴⁰。

立って見ていた僕がふと気がつくと、一人の男が僕の足下の埃の中に跪いて、僕の靴をせっせと拭いていた。土の乾いた地中海の東の地方でどこに行っても後をついてくる、例の靴磨きだった。まだ十七、八歳の汚い少年で、僕を見上げてにやりと笑った。憐れみを乞うような、同時にもう大丈夫つかまえたぞというような、狡猾な無知な笑い顔だった。〔中略〕あのあまりにも社会的地位の低い人に対して感じる困惑にしばらく狼狽した¹⁴¹。

アテネの街の中心は新古典主義の建築で溢れ、バスが走り西欧化が進んでいるように見えていた。しかし一方で、一般のギリシア人の生活はといえば、克服しがたい貧しさと非西欧的な要素をまじえていた。それが人々の様子や建物から感じられた。

安倍は、ギリシアに到着してすぐ「唯陋屋の多いこと、ギリシヤ人の生活のみぢめらしいこと、は、最初の瞥見にも強く感ぜられた」¹⁴²と述べている。さらに安倍は皮を剥がれた小羊を背負う女の子を見かけた。

人ごみの中を、小さな女の子が毛皮を剥いだ小羊を背負つて歩いて居る。少女の肩から羊の首がだらりと垂れて居る姿が、残酷で見て居られなかつた¹⁴³。

竹山は、アクロポリスの麓のテセウス（ヘファイストス）の神殿のあたりで、貧民の巣窟のような光景を目にしている。

この神殿の横に、昨夜下車したテゼウス停車場があった。このあたりは震災後の東京の郊外のように、バラックが並んでいた。それに交じって小屋掛の見世物の車が一台停っていた¹⁴⁴。

このバラックは、第一次世界大戦直後にはじまったギリシア・トルコ戦争で、ギリシア軍が敗北した結果、小アジアから流入したギリシア系難民の居住地だったのではないかと推測される。戦争が終結してすでに8年が経過していたが、100万から150万人と言われた難民を定住させ、ギリシア社会に統合するのは容易なことではなかった。この時期にまだバラック住まいの人々が残されていて不思議はない¹⁴⁵。

同様に、竹山の描く以下のような人々も、そういった難民の中から生まれた、レンベティカという民衆歌謡¹⁴⁶の主題となる、ギリシア社会の底辺の人々である。

行き交う人はみな疲れたような、投げやりのような、そうして目の鋭い、貧しい人が多かった。そうして、かれらの嗜む羊の乳の臭い、杏仁の臭い、強い煙草の臭いがした¹⁴⁷。

ステレオタイプ化されたギリシアのイメージとは全く異なる、陰のある、猥雑で寂れた印象を、1950年代に旅した三島もやはり感じとっている。

アテネの町は、行人の数も商品も数多いのに、日本の縁日のような物寂しさがどこかしらにひそんでいる。夜の街衢^{がいく}のありさまはブラジルの都会に似て、路上で立話をしている人が沢山おり、それを縫って歩くことが容易でない¹⁴⁸。

ブラジルの都会の賑やかさと日本の縁日のような物寂しさを併せ持つギリシアの首都アテネ——三島の作家としての鋭い感受性ならではの描写であろう。

(3) ギリシア国内の学術文化、政治状況と外交政策

明治政府の代表的な政治家のひとりであった黒田の旅行記は、ギリシアの政治家や軍人から得たと考えられるギリシアの国内状況の詳細なデータを含む。彼の旅の記録はきわめて素気ないもので、個人的な印象や感想は一切記していない。おそらく政治家としての義務感からであろう、ギリシアの国土面積、人口にはじまり、民族構成、憲法の内容、国王の権限、議会、宗教、王室費、選挙制議会の規則、職業別人口割合、経済状況、産業、通信、軍事組織や軍施設などについて極めて詳しく記している。たとえば、軍の施設を見学した際には、以下のように記している。

砲兵營兵室ハ假建築ニシテ寢床ハ我カ野營兵室ノ如ク作り草蒲團ヲ敷カス板上ニ臥ス毛布ハ小二枚小枕一個ヲ給ス銃、脊囊、水筒ハ床上壁ニ掛ク一屋一中隊ヲ入ル内部ノ勤務及室ノ掃除不充分ニテ恰モ野營ニ在ルカ如シ¹⁴⁹

砲兵大隊士官室ハ本建築ニシテ二階造ナリ分テ書類、製圖、集會ノ三室トス内部ノ規則調ハス掃除等皆不充分ニ見受ケタリ¹⁵⁰

街の中に見られた衛生観念の欠如は、軍の施設にまで及んでいたことがわかる。

黒田は、当時の国際社会において、ヨーロッパ列強の利害関係に翻弄されるギリシアの姿を見逃していない。彼は、大国のはざまにあって国家の繁栄を図らねばならぬ点が、小国ギリシアの政治家が苦勞する点であると指摘している。そのうえで、彼は前ギリシア首相アレクサンドロス・クムンドゥロス元首相¹⁵¹の言葉を「百世不刊の確論」と評価している。

希臘ハ蕞爾タル小國ヲ以テ歐洲強國ノ間ニ介立シ之ト後先シテ永ク其國家ノ命脉繁譽ヲ保維セントス是レ希臘政治家ノ焦心苦慮スル所ナリ前總理大臣「クウムーンドューロス」國是ヲ議定シテ曰、

〔中略〕小國ノ大國ノ間ニ介立シ永ク國脉ヲ保維セントスルニハ
 奇策猾計一時ヲ摸稜シー日ノ苟且儉安ヲ希圖スルヘキニアラスシ
 テ外ハ懸直自ヲ守リ内ハ殖産興業ヲ獎勵シテ徐ロニ貧弱ヲ救拯ス
 ルニアリ〔中略〕「クムンドューロス」氏ノ言ハ實ニ百世不
 刊ノ確論ナリト¹⁵²

黒田が実際にクムンドゥロスと面会したか否かは、旅行記からは確認できない。しかしながら、首相、外相、国王との面会を果していることから、おそらくクムンドゥロスとも面会して、国家のあるべき姿について意見を交換したものと思われる。

ギリシアの学術文化については、歴史学者の黒板の記述が興味をひく。安倍や竹山は、ギリシアでは古代遺跡が放置され、保護されていないと述べていた。一方黒板は、別の視点から古代の遺跡を見ていた。彼が目を向けたのは、ギリシアでおこなわれていた発掘事業である。産業も未発達で、陸海軍の軍事力も十分とは言えないギリシアに、古代遺跡を発掘する国力がないことを黒板は見抜いていた。しかし、彼が足を運んだミケーネはドイツのシュリーマンが、オリンピアはドイツ調査団が、デルフィはフランス調査団が、それぞれに発掘を進めていた。これらの遺跡にかぎらず、ギリシアの考古学的発掘の半数以上は、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカといった欧米列強によって、膨大な費用をかけて行われていた。

余はミケーネに遊んでシュリーマン博士の功績を偲び、オリムピアの廢墟、さてはデルフォイの殿趾を訪ひて、獨佛兩國の如何に多く廢掘のために勞力と、金力とを費し、かを觀た、希臘に於ける廢掘事業はかくて半以上外國人の手に成功されんとして居るのである、そしてこの方面に於ても英獨佛米等の列強が互に相競争せる有様を呈せるは面白い現象であると思ふ¹⁵³。

20世紀初頭の帝国主義盛期において、欧米列強は軍事力・経済力で争った

だけでなく、ギリシアの古代遺跡の発掘をめぐり、文化の領域でも熾烈な競争を展開していた現実を黒板は知るのである。実際、当時のギリシアでは、1846年創設のフランスの研究所をはじめ、欧米各国の研究・教育施設がすでに活発に活動していた。これらの研究所が、ギリシア政府から許可を得た上で精力的に発掘をおこない、次々と学問的成果をあげていたのである¹⁵⁴。発掘という極めて学問的な企てが、国家間の競争裡にある現実が、黒板にとっては新鮮な驚きであったのだろう。

黒板は、美術と考古学は明確に区別されるべきだとする自説を展開する。美術に必要な無限の想像力は、考古学では排除されねばならない。考古学の目的は、あくまで史跡がつくられた当時の状態を復旧し保存することである。各国の考古学者が競って発掘をおこなうギリシアで、彼が理想とする考古学研究を目のあたりにできたことを、黒板は喜ばしく感じている¹⁵⁵。

黒板が賞賛するのは発掘事業だけではない。ヨーロッパ諸国と比較したギリシアの博物館の状況についても好意的に記している。

歐洲諸國にあつては多くその都市に博物館を有するがために、この點に於ては少からず不滿の感を生ぜしむは止むを得ぬことである、たゞ室内の裝飾等を陳列品の時代たらしめて僅に満足するに過ぎぬ、それが希臘に入れば首都アテーネなる國立博物館の外、到るところの遺跡に小博物館を建て、ある、オリムピア然り、デルフォイ然り、エリユジス、コリントと、殆んどすべての遺跡そのもの、印象が觀覽者の腦裏に鮮やかに刻まるゝと同時に、その遺品に對して何ともいへぬよい心地がする、そして國立博物館はこの小博物館を建つるに足らざる彼方此方の遺跡から獲たるものを蒐集陳列する處に過ぎぬ、必ずしもその多きを誇るの要はないのであるが、アテーネの國立博物館は同時にまた實に絶品が蒐められつゝあるのである、〔中略〕その各室すべて一粒選りの貴珍なる古美術品と稱するに足るのは、歐洲諸國の博物館が單に豊富

の點ですら企及し得べきものではない、何といつても流石は古代文明の中心たる希臘本國である、と余は二度三度こゝに遊んで忽ち希臘美術史を諳んずることが出來たやうに感じた、これ實にカッパディアス氏の功績に歸すべく、その周到なる監督の下に、希臘の博物館が世界に名高い所以である¹⁵⁶。

最終的に、黑板の思考は日本の現状に向かう。

我が國に於ける博物館事業、史蹟の保存と復舊、古墳發掘等、我が美術界考古學界の大に努力せざるべからざるもの今や目前に迫つて居る、余は他山の石としてまた希臘に學ぶべきもの多いであらうと信ずる¹⁵⁷。

歸国後、黑板が中心的役割を果たした日本における史跡保存のあり方に、ギリシアで目にした發掘事業や博物館展示の経験が、少なからぬ影響を与えたであろうことは想像に難くない。

ギリシアの文化・學問状況については、伊東も好意的な評価をしている。彼自身、在アテネのドイツの考古學研究所で公開講演に参加したことがうかがわれる。

こゝに感心な事は希臘人の學術に忠實であることで、國力不相應な立派な大學と高等工業學校とがある。又大きな博物館もあつて入場料を取らない。土耳其とは大違ひである。アクロポリス以下無数の古跡を何處でも無料で隨意に見ることが出来る。此の邊は大きに文明國のやり方を模倣してゐるのである。

近頃希臘の考古學的研究は益々盛である。殊に獨逸は最も熱心で、當市に研究所を設け、デルフェルド博士が主任となつて仕事をしてゐる。博士は時々研究の結果を有志者に講義して聞かせてゐるが、私も三回聴くことが出來た¹⁵⁸。

ギリシア国内の政治状況に言及している旅行者はほとんどいない。おそらく旅行者自身がギリシアの政治状況に詳しくなかったこと、興味関心を持つにいたらなかったことが主な理由であろう。政治を職業とした黒田を除いて国内政治について触れた唯一の例は、管見の限り、竹山の旅行記である。

「今日シントグマ広場を通ったら、王宮には人がいないようでしたが、希臘の王様はどこにいるのですか？」

「われわれの王様？」と老人は表情を変えた。そうして鋭い目つきをして僕を見ていった。「王様は流竄中だ。グルケンブルグの王朝はつぶれた」

僕は意外だったので沈黙した。老人も黙った。僕にはわかりに了解した。この人のこのあふれる憂愁の表情は、ながいあいだの憤怒や怨恨や諦念の挙句だった。〔中略〕

僕にはいままで、廢墟も、荒野も、回教風の寺院も、発掘の跡も、小川も、貪婪で怠惰な住民もみんな面白かった。めずらしい風物に接して、自分の心の中の未知の絃があたりらしい音をあげるのを楽しんで、その感傷に溺れていた。僕は希臘にきて自分の荒れた想念のあらわれを見た。堆積した大理石の破片のあいだに残っている美しい浮彫を見て、そこに儂ない自分のいのちのさまを読み取って、夢想にふけた。しかるに、いまはわかりに自分の目の前に幕が引きあげられたように感じた。僕は知った。この老人にとっても、また毎日のように外国人とみると往来でよって来る各種のたかりにとっても、この現在の希臘首都の生活は不安不愉快以外の何ものでもないらしかった。ここには革命の脅威が常住に生活の中であって、空想や議論の中にあるのではなかった。華やかな芝居をみてから舞台裏に降りて行って、そこに投げだしてある道具を見たり、働いている人々が惨めで退屈そうなのを見ておどろくように、僕はいまこの沈黙の中に、希臘人の生活

の悲惨をかれらの側から感じた。僕は老人に慰めになることをいおうとして、他にいうすべもしらなかったので思いついたままにいった。

「でも、ヴェニゼロスのようなえらい人も出てきて、希臘の国際的地位も上がったし……」この言調は自分でも気のつくほど貧弱で途中で消えた。

老人は苦いものでも噛んだように唇をしかめて、首を振っていった。

“Nous sommes mal gouvernés!”¹⁵⁹

ホテルで出会った教養あるギリシア人の老人と竹山との会話である。竹山が希臘を訪問したのが1930年であることを考えると、この老人の最後の言葉には納得がいく。ギリシアでは、第一次世界大戦以降、王党派と反王党派が激しく対立し、国民全体を巻き込んだ政治的、社会的分断が生じていた。近代ギリシア史上、この事態は「国民大分裂（εθνικός σχισμός）」と呼ばれている。反王党派を指導したのが、竹山が言及した「ヴェニゼロス」である。

エレフセリオス・ヴェニゼロス（1864～1936）は、軍事・行政の面でギリシアの近代化を進め、第一次世界大戦ではギリシアを戦勝国の側に導いた。ヴェルサイユ講和会議でも八面六臂の活躍で、小国ギリシアの要求を最大限欧米の大国に認めさせ、ギリシアの国際的地位を高めた。しかしその一方で、彼個人や彼の政策に反対する王党派の政治家、軍人、一般の国民は、容赦のない弾圧に晒された。戦後も王党派とヴェニゼロス派の対立は続いた。政治状況は常に不安定で、社会の分断が解消される気配はなかった。1920年代にはギリシア・トルコ戦争の敗北の責任を問うかたちで、王党派政府の主要政治家と軍人が国家反逆罪の廉で処刑された。さらに、ヴェニゼロス派のクーデタで共和制へと移行し、ヴェニゼロス派のパンガロス将軍の独裁が続いた。竹山が訪問したのは、ヴェニゼロスが政権を掌握していた時代である。デンマーク王家の血を引くグリュックスブルク家の国

王一家は国外に亡命中だった¹⁶⁰。

ふたりの会話から明らかなように、老人は王党派である。王党派にとって、ヴェニゼロスの政府は悪そのものである。竹山は、ギリシアの政治状況についてある程度知識を持っていたようだが、王党派のギリシア人の前でヴェニゼロスを賞賛してしまった点は、不覚であったと言わざるを得ない。しかし、この会話をきっかけに、竹山は旅人の立場からギリシアを見るだけでなく、ギリシア人の立場から彼らが置かれた現実というものを意識するようになった。

意図せずして、近代ギリシアの主要な外交政策である領土拡張の言説に遭遇したのは黒板である。黒板は、古代ギリシア文明の面影を追うために、ギリシアからオスマン帝国領に足を延ばした。彼は、ホメロスの故郷とされる小アジア西岸都市スミルナで下船を待っていた時、ギリシア人の青年に出会った。青年は、英語で黒板に話しかけた。

彼いふ、古希臘語の精粹は今や希臘本土にあらずしてキオス又はスミルナ等に保存されて居る、余等は土耳其政府の下にあるも土耳其人にあらず、回教も奉せねば土耳其語をも知らぬ、若し一たび機熟せば我が希臘民族は國都をアテーネよりコンスタンチノープルに遷して希臘大帝國の古に復するであらうと、嗚呼彼等は昔の希臘を夢みつゝあるのである、しかもこの夢の實現する機會ありやなしや¹⁶¹。

ギリシア人青年が語っているのは、歴史的にギリシア文化圏であった領域をギリシア国家の領土に包摂することを目指す、ギリシアの領土拡張思想「メガリ・イデア」そのものである。ギリシアは近代国家建国以降、この思想を外交政策の軸に据えて、着々と領土拡張を進めていた¹⁶²。黒板は、古代ギリシアの面影を遺跡の中に追い求める旅を続けていたのであり、同時代のギリシアの政治や外交への関心はまったくなかったといってよい。黒板には近代ギリシアの外交政策や「メガリ・イデア」について知識があっ

たようには思われぬ。しかし「メガリ・アイデア」が一般のギリシア人に広く支持されていたことをうかがわせる貴重な記述がある。

彼はスミルナに下船して、スミルナの街を歩く。そこで目にした光景から、ギリシアの歴史はギリシアというバルカン半島南端の国家の領域に限定されるものではないことを実感する。船上のギリシア人青年の言うことにも一理あると考えたかもしれない。

スミルナは小亞細亞の一中心である、しかしその忙しき街を行きかふ人は殆ど皆希臘人である、彼の一青年の言葉のやうにその希臘人が土耳其語を解せぬものが多い程、スミルナ市は希臘的である。マホメット宗の寺院は殆んど觀るべきものなきに、希臘教の寺院に輪奐たるもの少くない、その名は小亞細亞なれど、さながら希臘の一部分なるかのやうな感がする、然り小亞細亞は古代から亞細亞の一部として觀るべきものではない〔中略〕もし希臘史を希臘本土に限つたならば、その真相を解することは出来ぬであらう〔中略〕小亞細亞は亞歷山大王以後希臘の一部となつたものではない、その以前も全く希臘本土とその文明を同域にしたのであつた¹⁶³。

ギリシアの歴史は国境外に及び、オスマン帝国のギリシア人はギリシア人としてのアイデンティティを保持しているらしいことを、黑板は感知する。ギリシア人が大多数を占めるスミルナがギリシア領になってもおかしくはないと、黑板は考えたかもしれない。

この状況を見て、黑板はオスマン帝国の今後の困難を、清王朝と比較しつつ予想する。

もし滿人を土耳其人とするも、漢人種を希臘人のみといふ譯に行かぬ、アルメニヤ人、猶太人、アルバニヤ人と種々の種族が土耳其帝國民として、各その言語を異にし、その宗教を異にして居る、

滿漢兩族が互に軋轢しながら猶ほ國民的自負の上から外國に對して一致の行動を取り、言語の間にも宗教の點でも融和しつゝあるが如きと同視することは出來ぬ、希臘人を始め決して土耳其國民と呼べるゝを潔しとせぬ、たゞにその政府に心服して居らぬのみでなく、余がトロヤに遊んだとき一泊したレンキョイの寒驛ですら別に希臘人の間に行はるゝ貨幣を有したのには一驚を喫したのである、されば土耳其人が國民を支配し制御するには究竟するところ唯一の兵力あるのみ¹⁶⁴

オスマン帝国内の錯綜する民族・宗教が原因となってなんらかの事件が起これば、すぐさまロシアは南下を企て、オーストリアはバルカン半島に進出しようとするだろう。そのような動きがおこれば、ドイツ、フランス、イギリスも黙ってはいまい。バルカン半島の危うさと共に、列強の利害が絡みあう外交活動がコンスタンティノープルで繰り広げられるさまを黒板は記している¹⁶⁵。黒板の予想はあたった。1912年、オスマン帝国を敵としてバルカン諸国が連合し、バルカン戦争が勃発した。その戦争は第一次世界大戦の序章となるのである。

6. ギリシアと日本

日本人旅行者のギリシア旅行記の特徴として、欧米人のギリシア旅行記と明らかに異なる点は、ギリシアの中に日本を感じている点である。彼らの教養の中で、ギリシアは明らかにヨーロッパであった。しかし実際に足を踏み入れたギリシアのところどころに、彼らは日本と類似する点を見つけている。彼らは西（ヨーロッパ）を旅しながら、東（日本）を闊歩しているかのような感覚を持つのである。日本人旅行者によるこの「発見」は、まったく的外れとは言えない。なぜなら、ギリシアは西（ヨーロッパ）に属するのか東（オリエント／アジア）に属するのかという問いは、近代国家独立以来、ギリシア人自身を悩ませていた問題でもあったからである。

確かに、古代ギリシアがヨーロッパ文明の揺籃の地であったことと、キ

リスト教国家であることを考えると、ギリシアはヨーロッパと考えられるだろう。一方で、古代ギリシア世界が終焉したのち、東ローマ（ビザンツ）帝国の一部とされたギリシアの地は、ヨーロッパの主流の歴史とは異なる道を歩んだ。さらに、イスラーム教を奉じるオスマン帝国支配期に、彼らの風俗習慣はより東方的な要素を含むようになる。さらにつけ加えるなら、地理的にギリシアはヨーロッパの最東端であり、アジアの最西端であるという見方もできよう。

近代ギリシア国家は、ヨーロッパが賞賛する古代ギリシア文明の正統な継承者としてのアイデンティティを強調することで、みずからの「ヨーロッパ性」を誇示した。一方で、ギリシアの地とそこに生きる人々が経験してきた歴史の道程は、彼らの「ヨーロッパ性」に疑義を抱かせるに十分であった。ギリシア人たち自身も、みずからの東方的な要素から断絶して、ヨーロッパが理想とする古代ギリシアの末裔としての近代ギリシアという枠組みに収まることに、居心地の悪さを感じていた。その結果、近代ギリシアのアイデンティティは東西のあいだに定まらぬまま浮遊していた。この問題をめぐっては、国家成立以降、多くの知識人がさかんに議論を戦わせた¹⁶⁶。先に述べた「メガリ・イデア」も、ギリシア人の歴史の東方的要素を抜きには、そもそも生まれることのなかった政治思想だった。

東方の国日本からの旅行者は、そのようなギリシア（人）の持つ東の要素を敏感に感じ取っていたようである。この点について最も直截に言及しているのは、伊東である。

希臘は御承知の通り、バルカン半島の南端に突出した小半島國で、籍は歐羅巴に在るが、實は半東洋國で、未開國の仲間を脱しない憐れむ可き國である¹⁶⁷。

〔ピレアス〕市の體裁は奇妙に土耳其的である。或は土耳其の方が奇妙に希臘的であつたのかも知れない¹⁶⁸。

伊東は日本から東回りでオスマン帝国からギリシアに入った。ギリシアの風景や人々の風俗が、オスマン帝国のそれと大して変わらないことにすぐに気づいたのであろう。東洋とはすなわち未開の後進地域であるという、西欧中心の文明史観を無批判に受け取っている伊東の書きぶりである。

ギリシア人の東洋的なところは、まずその顔つきにある。伊東は以下のように書いている。

〔希臘人は〕一般に顔は長い、これは鼻と頤が長い結果である。頭髪、眉、鬚髭みな漆黒で、眼も西洋人程青くはない。皮膚の色も幾分か東洋的黄土色を帯び、或は一見東洋人と思はれるものも少なくない¹⁶⁹。

安倍と竹山はさらに一步踏み込んで、ギリシア人と日本人の人相が似ていると指摘している。

オテル・ダングルテールのガイドといふ名刺を持つた一人の男が側にやつて来た。彼はギリシヤ人だらうが、顔付も日本人に似て、その使ふ英語も日本人の英語といふよりは寧ろ四國人の英語に近かつた¹⁷⁰。

〔ミュケナイの〕宿の主人は身體は長大だけれど、顔の焦げた色から様子なり、全く洋服を著た日本の百姓である¹⁷¹。

船はセミラミスといふかなりの巨船である。横ぶとりした日本人のやうな事務長の顔が、先づ私の心をくつろがせた¹⁷²。

僕は知っていた。いまの希臘人には往々日本人にそっくりの人相がある。僕のかたい黒い髪、眉、日本人独特のすどい目つきは希臘人の中に交じると、べつに目だたなかつた。そうして、こう

いうだらしのない恰好をしている方がかえってこの土地の人に見えるのだった¹⁷³。

日本人の見たギリシア
(19世紀後半～20世紀半ば)

竹山は、列車の中でギリシア人の陸軍士官二人と同席した。この時、竹山が彼らを日本人に似ていると感じただけでなく、彼らもまた竹山をギリシア人だと思ったという会話を交わしている。

コリントで二人の希臘の陸軍士官が乗りこんだ。現在の希臘人の血液の八割までスラヴだというのが、この国に来てから、まだ古代彫刻のような骨格の人を見たことがなく、むしろ多くの人が日本人にそっくりだった。ただ希臘人にはいくら大勢集まっているのを見ても、日本人の群衆に見るような、駆りたてられたような抑えられた精力の感じがまったく欠けていた。

二人の士官のうちのことに一人は、どこか栄養の不足を思わせる疲れた陰鬱さや、皮膚の色や、それからだらしのない崩れたような姿勢が、実に日本人に似ていた。いま一人の士官は二十一、二歳の、中央ヨーロッパで見られるような美少年だった。この二人は同じ制服をきていながら、同じ人種とは思われないほど、ちがった外貌をしていた。この国にはよほどの混血が行われているのだらう。〔中略〕

「日本人——？」と士官たちはさらに目をみはった。若い士官は人懐きそうな様子でいった。「どうもさっきから妙だと思っていましたよ。髪の毛や眼はまったくわれわれと同じなのに、旅行者のような様子をしてベデカの案内書を見ている。きっと外国に帰化した希臘人の息子が、親の故郷を見にきたのだらう、と同僚と話していました。』¹⁷⁴

三六七
(68)

第5章で紹介した安倍と修道女との会話でも、日本人とギリシア人とは顔つきが似ていると指摘されていた。このことから、この感覚の共有はあ

る程度一般化できるものだったのではないだろうか。

安倍は、ギリシアの雑踏とそこから聞こえてくる様々な音に東洋的なものを感じ、そこに気持ちの安らぎを覚え、ギリシアに親近感を抱いている。さらに、日本の具体的な場所との類似まで挙げている点は面白い。

さういふ喧噪と混雑との間には、西歐の市場では見られぬ一種の趣がある。それはやつぱり「東方的」とでもいふべきものであらう。私の如き極東人がそのそ（原文踊り字）一人で歩いて居ても、彼等は別に張目することもない。彼等は私を彼等の仲間と思つて居るのであらう、それよりも寧ろ仲間だとも仲間でないとも思つて居ないのであらう。何れにしても私は頗る安易な氣持でこの人ごみの中を彷徨した¹⁷⁵。

床の中で下の廣場でわめいて居る新聞賣子の聲を聞いて居ると、神田の須田町あたりが直ぐ間近にあるやうな氣がする¹⁷⁶。

自然の景観も日本的なものを感じさせている。竹山は、アクロポリス北面の岩壁から湧き出る洞穴「クレプシドラの泉」を見つけた。そこには苔が厚く密生していた。乾いた埃だらけのアテネとは趣を異にする場所である。

この小さい洞穴の中だけは草の葉が厚く繁って、一面にひたひたとうるおって、陰気で、周囲の焼跡のような乾いた山河とはまるで異なっていた。「ああ、日本の庭のようだ」と僕は思わず口にした¹⁷⁷。

湯川は、ヨーロッパ（西）とアジア（東）という二項対立で物事を考えようとする思考そのものに疑問を持った。彼はギリシア国王主催の「アテネの集い」最終日の講演者イオアニス・テオドラコプロス・アテネ大学教授の話の内容が腑に落ちなかった。講演内容の詳細は不明だが、湯川の文

章からおおよその内容は推測できる。哲学を専門とするテオドラコプロスは、ヨーロッパとアジアの世界観や思考様式は異なるものであり、両者は理解しあえない他者であると位置づけたのだろう。さらに、ギリシアのアイデンティティは西、すなわちヨーロッパの側にあることを強調しつつ話を進めたのであろう。

それ〔テオドロコポロス氏によるギリシア語での講演の英訳〕を読んでいるうちに気になってきたのは、ギリシャを東南端とするヨーロッパと、そこから東へ南へひろがるアジア——エジプトをふくめたアジア——とを、全く異質的なものとして区別する、彼の考え方であった。

翌日からデルフォイのアポロの神殿址を訪れて青銅の御者像に感嘆したり、エーゲ海の島々の——中でもクレタ島の、より古い文化の——遺跡を見たりしている間じゅうも、心のどこかにそれが引っかかっていた¹⁷⁸。

彼はテオドラコプロスの講演に納得できなかった理由を、帰国後の京都で見つけた。

京都へ帰って数日後の日曜日、北山杉の美しい木立を見にいった。そこにはギリシャと共通する簡素な直線美が見出された。そのあと高山寺の石水院によった。前に来た時には見あたらなかった二頭の鹿の木彫が陳列されていた。ギリシャ彫刻を思い出させる、すばらしい傑作である。住持の坊さんがやってきて運慶の作だと伝えられていると教えてくれた。美意識の普遍性を私は改めて痛感したのであった¹⁷⁹。

何が「美しい」のかといった基準には、ヨーロッパとアジア、西と東といった区別はない。ギリシアがヨーロッパであろうとアジアであろうと、その

ような分類には意味がない。テオドラコプロスの考え方は偏っている。空間も時間も問わず美意識は普遍であると、湯川は実感した。湯川はそこからさらに一歩進めて、普遍的なのは美意識ばかりではないと考えたのではないだろうか。ギリシアで生まれたさまざまな学問的・芸術的成果の背後には、真理を追究しようとする人間としての真摯な姿勢が通底しており、その姿勢そのものがいまや人類全体の普遍的な財産となっている。湯川自身もその恩恵を受け、物理学の分野で世界に貢献できた。そう彼は自覚したにちがいない。

おわりに

だいたい僕は遺跡というものに興味がないのだ¹⁸⁰

作家の村上春樹は、1986年から1989年までの3年間「常駐的旅行者」¹⁸¹としてギリシアとイタリアに暮らした経験を綴った旅行記『遠い太鼓』のなかでこう書いている。確かにこの旅行記には、文明の源としての古代ギリシア——といった、ギリシアの旅行記ではおなじみのステレオタイプのギリシアは登場しない。彼が記述するのは、エーゲ海の島のさびれ果てた港やお湯の出ないホテル、おんぼろレンタカーでの旅である。登場する人物も、宿の管理人だったり、バスの運転手だったり、バーの経営者だったり、ごく普通のギリシア人である。彼の旅行記は、日常の延長のなかに記されている。

1980年代後半の日本では、大学生がアルバイトをしたお金で海外に出かけることが難しくなくなった。海外旅行は大衆化し、旅行者の興味関心も多岐にわたるようになった。異文化に触れることが「特別な」何かではなく、日常の一部として受け取られるようになった。村上の旅行記は、日本社会の一般的趨勢と軌を一にしている。

村上は以前に何度もギリシアを訪問していた。このことが、彼のギリシア観に影響を与えていたとも考えられよう。ギリシア滞在以前に、彼は日

本で現代ギリシア語を熱心に学んでいる。彼がギリシア好きであることは間違いないだろう。しかし、彼のギリシア観は、これまでの日本人旅行者とは大きく異なっている。

本稿で見てきた7人の日本人旅行者にとって、ギリシアへの旅は、いわゆる「グランド・ツアー」の意味合いを持っていた。その基盤には古代ギリシアが生み出した普遍的な知や芸術に対する尊敬の念があった。ギリシアの地に足を踏み入れて、何か新たなものを見たい、感じたい、学びたいという貪欲さが彼らにはあったように思われる。一方、村上のギリシアの旅は、普遍の対極にある個としての身近な「楽しみ」を超えるものではない。もちろん、どちらが優れていてどちらが劣っているというわけではない。両者は、19世紀後半から20世紀後半にいたる1世紀の間の日本人の精神の変遷の一例に過ぎない。技術の発展に伴い人々が自由に世界を移動できるようになったとき、人々の精神は世界に背をむけて個人を志向したといたら言い過ぎだろうか。

竹山は、アテネのアクロポリスの麓にあるテセウス（ヘファイストス）神殿での出来事を語って、彼の旅行記を結んでいる。

やがて〔テゼウス神殿にいた〕梟は、重々しく空気を揺りながら舞い出した。柔かい羽毛がいくつかあたりに落ちた。梟は、神殿の軒下の欠けたケンタウルの浮彫に鋭い爪を立ててつかまって、挑みかかるようにじっとわれわれを見下ろした。

牧童は石を拾って投げようとした。僕はそれをとめた。彼は鞭を手にとって、上にむかってピシリ——ピシリと空を切った。しかし、梟は高い屋根の下にとまったまま、いつまでも元の内陣の中へ戻ろうとしなかった¹⁸²。

竹山はこのとき本当にこの情景を目にしたのだろうか。この部分は、明らかにヘーゲル『法の哲学』の「ミネルヴァのふくろうは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめる」¹⁸³というフレーズを意識しているように

思われる。ミネルヴァとは女神アテナであり、ふくろうは「知恵」の象徴である。普遍的な知の誕生したギリシアの地で、若き日の竹山は、「飛び立たない梟」を想像裡に描くことで、自分の知の力がまだ十分に熟していないことを象徴的に表現しようとしていたのではないだろうか。

- ¹ 「黒田清隆」国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第4巻（吉川弘文館、1984年）964.
- ² 黒田清隆「環遊日記（上）」『明治欧米見聞録集成』第5巻（ゆまに書房、1987年）5.
- ³ 黒田清隆「環遊日記（中）」『明治欧米見聞録集成』第巻（ゆまに書房、1987年）340.
- ⁴ 東京帝国大学の造家学科が建築学科となったのは1898年である。Architectureの訳語として「建築」という語を定着させたのは伊東である。ジラルデッリ青木美幸『明治の建築家伊東忠太オスマン帝国をゆく』（ウェッジ、2015年）47.
- ⁵ "伊東忠太", 日本大百科全書（ニッポニカ）, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-15)
- ⁶ ジラルデッリ青木美幸『明治の建築家伊東忠太オスマン帝国をゆく』（ウェッジ、2015年）24-25.
- ⁷ ジラルデッリ青木『明治の建築家』14-15.
- ⁸ http://news-sv.aij.or.jp/da2/yachou/gallery_3_chuta2.htm（最終閲覧2020年10月17日）
- ⁹ 伊東は、ギリシアに到着する前に、オスマン帝国領の小アジアの古代ギリシア植民市で古代エンタシスを含むギリシア建築をすでに数多く目にしていた。ジラルデッリ青木『明治の建築家』188-193.
- ¹⁰ ジラルデッリ青木『明治の建築家』14.
- ¹¹ ジラルデッリ青木『明治の建築家』274-276. ギリシアの東洋/日本建築への影響という考え方は日本人一般には広まり、今日でもそのような説を唱える記事をみかける。
- ¹² 伊東忠太「希臘旅行茶話」伊藤忠太建築文献編纂會編纂『見学紀行』（伊藤忠太建築文献第5巻）（龍吟社、昭和11年）607-616.
- ¹³ "くろいたかつみ【黒板勝美】", 国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-17); 廣木尚「日本近代史観研究の現状と黒板勝美の位置」『立教大学日本学研究所年報』（2016年）14-15号: 26-32.
- ¹⁴ 黒板勝美「西遊二年欧米文明記（上）」「西遊二年欧米文明記（下）」『明治欧米見聞録集成』第34、35巻（ゆまに書房、1989年）
- ¹⁵ 黒板「西遊二年欧米文明記（上）」9.
- ¹⁶ "あべよししげ【安倍能成】", 国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-18); "安倍能成", 世界大百科事典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-18); "安倍能成", 日本大百科全書（ニッポニカ）, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-18)

- ¹⁷ 文部省大臣官房総務課編『歴代文部大臣式辞集』（大蔵省印刷局、1969年）465。
- ¹⁸ 安倍能成「プリンディシよりビレウスへ」『思想』第66号（1927年4月）、129-136;同「アテーネの散策」『思想』第68号（1927年6月号）、110-121;同「アテーネの散策」『思想』第69号（1927年7月号）、132-142。
- ¹⁹ 安倍能成『藝術の國と自然の國』（ギリシヤとスカンデイギア改題）（小山書店、1941年）7-9。
- ²⁰ 安倍『藝術の國』4-5。
- ²¹ 本稿では、『竹山道雄著作集』全8巻（福武書店、1983年）を底本とした平川祐弘編『竹山道雄セレクション III 美の旅人』（藤原書店、2017年）に収められた版を用いる。
- ²² "たけやまみちお【竹山道雄】", 国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-19); 平川祐弘編『竹山道雄セレクション III 美の旅人』（藤原書店、2017年）567-573。
- ²³ 竹山道雄「エーゲ海のほとり」（全4回）『自由』（1969年11月号）188-199,（1969年12月号）253-265,（1970年1月）234-243,（1970年2月）234-243。なお、第4回の末尾に「つづく」と記されているものの、続編が発表された形跡はない。
- ²⁴ "みしまゆきお【三島由紀夫】", 国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-20); "三島由紀夫", 日本大百科全書（ニッポニカ）, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-20)
- ²⁵ 三島由紀夫「希臘・羅馬紀行」『藝術新潮』第3巻第7號（1952年7月）145-162。
- ²⁶ 柴田勝二は、外界の実物を三島が目にしたときに、彼の観念のなかのギリシア観——青年の美しい肉体によって担われる可視的、現世的世界——が正しいと確信をもって証明されたことを含め、自身があらかじめ持っていたギリシア観を実物を「見る」ことによって追認する方向性をもつこの旅行記の特徴を「〈アポロ〉的な明証性」と表現している。柴田勝二『「アポロの杯」——〈観光〉する眼差し』『国文学解釈と鑑賞』（2000年11月）145-147。
- ²⁷ 佐藤秀明「解説」佐藤秀明編『三島由紀夫旅行記集』（岩波文庫、2018年）384-389。
- ²⁸ "みしまゆきお【三島由紀夫】", 国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-20); "三島由紀夫", 日本大百科全書（ニッポニカ）, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-20)
- ²⁹ "湯川秀樹", 日本大百科全書（ニッポニカ）, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.stri.toyo.ac.jp>, (参照 2020-10-20)
- ³⁰ 湯川秀樹『湯川秀樹著作集』全10巻、別巻（岩波書店、1989-1990年）
- ³¹ 湯川秀樹「アテーネの集い」『湯川秀樹著作集 6』（岩波書店、1989年）155。
- ³² 講演内容の要約の記事が、以下のギリシア語新聞『カシメリニ』に掲載されている。
<ΟΙ ΒΡΑΒΕΥΜΕΝΟΙ ΔΙΑ ΤΟΥ ΝΟΜΠΕΛ ΟΜΙΛΟΥΝ ΑΠΟ ΤΗΣ ΠΝΥΚΟΣ. ΕΙΣ ΤΗΝ ΙΚΑΝΟΤΗΤΑ ΤΩΝ ΕΛΛΗΝΩΝ ΝΑ ΣΥΛΛΑΜΒΑΝΟΥΝ ΑΦΗΡΜΕΝΑΣ ΕΝΝΟΙΑΣ ΟΦΕΙΛΕΤΑΙ Η ΠΡΩΤΗ ΑΝΑΠΤΥΞΙΣ ΤΩΝ ΕΠΙΣΤΗΜΩΝ ΕΙΣ ΤΗΝ ΑΡΧΑΙΑΝ ΕΛΛΑΔΑ>, *Η ΚΑΘΗΜΕΡΙΝΗ*, 6 Ιουνίου 1964. この講演原稿の原本が現存するかは不明である。
- ³³ 湯川秀樹「ギリシヤの自然と天才」『湯川秀樹著作集 6』（岩波書店、1989年）157、

- ³⁴ 本稿で用いたのは以下の2つのエッセイである。「アテネの集い」、「ギリシャの自然と天才」『湯川秀樹著作集 6』（岩波書店、1989年）153-164.
- ³⁵ 渡邊雅弘・編『日本西洋古典學文献史—切支丹時代から昭和二十年までの著作文献年表—（一）』文部省科学研究費補助金特定領域研究（A）「古典学の再構築」（代表 中谷英明）報告書（愛知教育大学 渡邊雅弘、平成13年）4-12.
- ³⁶ 元来『萬國史』は教養書として書かれたものであり、学問的価値は低かった。このため、ドイツ（ランケ）歴史学の日本への導入に加え、1886年に東京帝国大学文科大学に史学科が創設されたのをはじめ、高等師範学校に地理歴史の専修科ができるのにもない、『萬國史』は教科書として使用されなくなった。明治20年（1887年）代には、日本人の研究者による西洋史の教科書が書かれるようになったことも、『萬國史』が使用されなくなった一因である。岡崎勝世「日本における世界史教育の歴史（I-1）——『普遍史型万国史』の時代——」『埼玉大学紀要（教養学部）』第51巻第2号（2016年）29-39. 佐藤孝己「S.G. グッドリッチと『パーレーの万国史』」『英学史研究』第2号（1970）6, 13-16.
- ³⁷ 筆者が参照にしたのは、*Peter Parley's Universal History*（1874年版—第3版?）である。なお『萬國史』では、ローマがギリシアを征服したところで古代ギリシア世界の記述は終わる。ビザンツ帝国を扱った記述は一切含まれていない。それに続く章が、約2000年隔てギリシアのオスマン帝国からの独立とその後のギリシア王国について1章割かれている点は興味深い。
- ³⁸ 福沢諭吉「西洋事情」『福沢諭吉著作集』第1巻（慶応大学出版会、2002年）33.
- ³⁹ 福沢「西洋事情」142.
- ⁴⁰ 福沢諭吉「世界国尽」『福沢諭吉著作集』第2巻（慶応大学出版会、2002年）104.
- ⁴¹ 黒田「環遊日記（中）」290：本稿では扱わないが、維新・明治初期に活躍した鹿児島出身の中井櫻洲（中井弘）（1838～1894）は、1876年12月から1877年9月5日までヨーロッパ諸国を漫遊し、アテネのパルテノン神殿の印象を以下の漢詩に残している（アテネ訪問は1877年3月2日）。
- | | | | |
|--------|----|-----|---------|
| 船は到る | 名都 | 雅典国 | 船到名都雅典國 |
| 歐洲の文学は | 此に | 淵源す | 歐洲文學此淵源 |
| 山上 | 猶ほ | 留めて | 遺跡在り |
| 山上 | 猶留 | 遺跡在 | 經盡風霜二千年 |
| 經尽くす | 風霜 | 二千年 | 經盡風霜二千年 |
- ここには、ヨーロッパ文学の起源がアテネにあるという明確な理解があったことが看取できる。川口久雄編『幕末明治海外体験詩集』（大東文化大学東洋研究所、1984年）、75.
- ⁴² 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」268.
- ⁴³ 安倍『藝術の國』3.
- ⁴⁴ 湯川「アテネの集い」153.
- ⁴⁵ 三島由紀夫「アポロの杯」佐藤秀明編『三島由紀夫旅行記集』（岩波文庫 2018年）132.
- ⁴⁶ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」266-267.

- ⁴⁷ 安倍『藝術の國』97-98.
- ⁴⁸ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」269-270.
- ⁴⁹ 安倍『藝術の國』77.
- ⁵⁰ 竹山道雄「希臘にて」平川祐弘編『竹山道雄セレクション—III 美の旅人』（藤原書店、2017年）36.
- ⁵¹ 湯川「ギリシャの自然と天才」159.
- ⁵² 湯川「ギリシャの自然と天才」163-164.
- ⁵³ 三島「アポロの杯」153.
- ⁵⁴ 柴田勝二「＜日本＞への出発——『林房雄論』と『アポロの杯』をめぐって——」松本徹・佐藤秀明・井上隆史『三島由紀夫研究①三島由紀夫の出發』（鼎書房、2005年）96.
- ⁵⁵ 安倍『藝術の國』15-16.
- ⁵⁶ 安倍『藝術の國』29.
- ⁵⁷ 安倍『藝術の國』75-76.
- ⁵⁸ 三島「アポロの杯」138.
- ⁵⁹ 竹山「希臘にて」102-103.
- ⁶⁰ 伊東「希臘旅行茶話」607.
- ⁶¹ 黒田「環遊日記（中）」308.
- ⁶² Michael Herzfeld, *Ours Once More: Folklore, Ideology, and the Making of Modern Greece* (New York: Pella, 1986), 75—76; Stathis Gourgouris, *Dream Nation: Enlightenment, Colonization and the Institution of Modern Greece* (Stanford, California: Stanford University Press, 1996), 140-142; Effi Gazi, *Scientific National History: The Greek Case in Comparative Perspective (1850-1920)* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2000), 68-70; Έλλη Σκοπετέα, *Φαλμεράιερ Τεχνάσματα του αντιπάλου δέους* (Αθήνα: Θεμέλιο, 1999).
- ⁶³ 筆者の手元にある当時の代表的な旅行案内書『ベデカー』（1909年版）には、ファルメライヤーの説についての説明がある。ただし、この説の真实性については確証を与えていない。Karl Baedeker, *Greece. Handbook for Travelers*, 4th revised edition (Leipzig: Baedeker, 1909), xlvi. 本稿で扱った旅行者の中で、『ベデカー』を携帯していたことがわかるのは、安倍能成と竹山道雄である。安倍は1909年版を携帯していた。安倍『藝術の國』85.
- ⁶⁴ 安倍『藝術の國』24-25.
- ⁶⁵ 安倍『藝術の國』88, 90.
- ⁶⁶ 安倍『藝術の國』61.
- ⁶⁷ 古代ギリシアの歴史や文化に興味を示さない現代のギリシア人に対する不満は、19世紀前半のオスマン帝国下のギリシア地域を訪れたヨーロッパ人旅行者の記録にも頻出する。例えば以下を参照。William Martin Leake, *Travels in Northern Greece* (London, 1835), I, 332; IV, 488.
- ⁶⁸ 安倍『藝術の國』21.
- ⁶⁹ 竹山「希臘にて」114.
- ⁷⁰ Terence Spencer, *Fair Greece Sad Relic: Literary Philhellenism from Shakespeare to Byron*

(London: Weidenfeld & Nicolson, 197-200; Cf.) B.F. Cook, *The Elgin Marbles* (London : The British Museum Press, 2008).

- ⁷¹ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」286.
- ⁷² 安倍『藝術の國』57.
- ⁷³ バルテノン神殿の彫刻のイギリスへの持ち去りを、最初に非難したのはイギリス人詩人のバイロンである。彼は、1812年に出版された『チャイルド・ハロルドの巡礼』の中で、エルギン卿の行為を強く非難している。熊谷園子「バイロンと『エルギン・マーブルズ』」『イギリス・ロマン派研究』16（1992年）: 85-92.
- ⁷⁴ 安倍『藝術の國』65.
- ⁷⁵ 伊東「希臘旅行」614-615.
- ⁷⁶ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」309-310.
- ⁷⁷ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」309.
- ⁷⁸ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」310.
- ⁷⁹ 竹山「希臘にて」49.
- ⁸⁰ 「豚の目」とは、竹山が読んだバイロンの伝記のなかの逸話に出てくる。バイロンがギリシア独立戦争に参戦するためにギリシアに向った時、トルコ人最良の従者は、なぜ主人（バイロン）が、「南京虫と、蠅と、泥棒の国」にわざわざ出かけていくのが理解ができなかった。バイロンは、それに対して、豚の目で物を見て、他には何も見えぬ者にとっては、「ギリシア」とは「南京虫と、蠅と、泥棒の国」でしかなく、何の価値もないと答えたという。竹山「希臘にて」49-50.
- ⁸¹ 竹山「希臘にて」50-51.
- ⁸² 竹山「希臘にて」51.
- ⁸³ 竹山「希臘にて」53.
- ⁸⁴ 竹山「希臘にて」56. 引用文中の難読と思われる漢字のみルビをふった（以下同様）.
- ⁸⁵ 竹山「希臘にて」58.
- ⁸⁶ 竹山「希臘にて」59.
- ⁸⁷ 竹山「希臘にて」132-33.
- ⁸⁸ Olga Augustinos, *French Odysseys: Greece on French Travel Literature from the Renaissance to the Romantic Era* (Baltimore & London: John Hopkins University Press, 1994) ,180.
- ⁸⁹ 畑浩一郎「近代ギリシアをめぐるふたつのイメージ シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』についての一考察」『聖心女子大学論叢』第132集（2018年）41-45
- ⁹⁰ Augustinos, *French Odysseys*, 183.
- ⁹¹ Augustinos, *French Odysseys*, 191.
- ⁹² 畑「近代ギリシア」50.
- ⁹³ 畑「近代ギリシア」51.
- ⁹⁴ 三島「アポロの杯」136-137.
- ⁹⁵ 安倍『藝術の國』47.
- ⁹⁶ 三島「アポロの杯」133.
- ⁹⁷ 竹山もバルテノン神殿の破壊に言及している。竹山は、ヴェネツィア軍に破壊された

と述べている点は正しいが、それを1世紀前の出来事として記述しているのは事実誤認である。竹山「希臘にて」70.

⁹⁸ 三島「アポロの杯」137-138.

⁹⁹ 湯川「アテネの集い」154.

¹⁰⁰ 安倍『藝術の國』15.

¹⁰¹ 安倍『藝術の國』24.

¹⁰² 竹山「希臘にて」63.

¹⁰³ 安倍『藝術の國』70.

¹⁰⁴ 竹山「希臘にて」75.

¹⁰⁵ 三島「アポロの杯」142.

¹⁰⁶ 竹山「希臘にて」106.

¹⁰⁷ 安倍『藝術の國』39.

¹⁰⁸ «Αβέρωφ, Γεώργιος», *Εκπαιδευτική Ελληνική Εγκυκλοπαίδεια* (Αθήνα: Εκδοτική Αθηνών, 1991), τόμος 1, 22.

¹⁰⁹ 安倍『藝術の國』61.

¹¹⁰ 竹山「希臘にて」80.

¹¹¹ 安倍『藝術の國』67.

¹¹² 竹山「希臘にて」127

¹¹³ 『ベデカー』によると、「文明化された国からの旅行者」にとって、ギリシアの旅の最大の生涯は、不潔さと害虫であると記されている。Karl Beadeker, *Greece. Handbook for Travelers*, 4th revised edition (Leipzig: Baedeker, 1909), xiii.

¹¹⁴ 安倍『藝術の國』80.

¹¹⁵ 三島「アポロの杯」149.

¹¹⁶ 安倍『藝術の國』22、28.

¹¹⁷ 伊東「土耳其埃及旅行茶話」614-615

¹¹⁹ 安倍『藝術の國』93.

¹¹⁹ 安倍『藝術の國』42-43.

¹²⁰ 竹山「希臘にて」78.

¹²¹ 三島「アポロの杯」141-142.

¹²² 三島「アポロの杯」143-144.

¹²³ 安倍『藝術の國』78-79.

¹²⁴ この法律では、日本人も制限対象となったので、日本では「排日移民法」と呼ばれる。

¹²⁵ Charles C. Moskos, *Greek Americans: Struggle and Success*, 2nd ed. (New Brunswick and London: Transaction Publishers, 2009).

¹²⁶ 安倍『藝術の國』83-85.

¹²⁷ 伊東「希臘旅行茶話」611-612.

¹²⁸ 安倍『藝術の國』85.

¹²⁹ William Miller, *Greek Life in Town and Country* (London: George Newnes Limited, 1905), 114.

¹³⁰ 竹山「希臘にて」98.

- ¹³¹ 伊東忠太「土耳其埃及旅行茶話」伊藤忠太建築文獻編纂會編纂『伊藤忠太建築文獻』第5卷（龍吟社、昭和11年）526-527.
- ¹³² 「ロマ」と記すべきところであるが、引用は、原文にある「ジブシー」のままにした。
- ¹³³ 竹山「希臘にて」55.
- ¹³⁴ 竹山「希臘にて」125.
- ¹³⁵ 竹山「希臘にて」126.
- ¹³⁶ 安倍『藝術の國』64-65.
- ¹³⁷ 安倍『藝術の國』66.
- ¹³⁸ 安倍『藝術の國』66-67.
- ¹³⁹ 安倍『藝術の國』93.
- ¹⁴⁰ 安倍『藝術の國』92.
- ¹⁴¹ 竹山「希臘にて」99.
- ¹⁴² 安倍『藝術の國』15.
- ¹⁴³ 安倍『藝術の國』65.
- ¹⁴⁴ 竹山「希臘にて」62.
- ¹⁴⁵ Renée Hirschon, “The Consequences of the Lausanne Convention: An Overview,” Renée Hirschon ed., *Crossing the Aegean: An Appraisal of the 1923 Compulsory Population Exchange Between Greece and Turkey* (New York and Oxford : Berghahn Books, 2003), 13-20.
- ¹⁴⁶ Gail Holst, *Road to Rembetika: Music of a Greek Sub-Culture Songs of Love, Sorrow, & Hashish* (Limni and Athens : Denise Harvey & Company, 1975); ダヴィッド・プリユドム（原正人訳）『レベティコ—雑草の歌』（サウザンブックス社、2020年）.
- ¹⁴⁷ 竹山「希臘にて」97.
- ¹⁴⁸ 三島「アポロの杯」151.
- ¹⁴⁹ 黒田「環遊日記（中）」329.
- ¹⁵⁰ 黒田「環遊日記（中）」330.
- ¹⁵¹ 19世紀後半10回首相を務めた政治家。「Κουμουνδούρος, Αλέξανδρος», *Εκπαιδευτική Ελληνική Εγκυκλοπαίδεια* (Εκδοτική Αθηνών, 1991), τόμος 5, 59-60.
- ¹⁵² 黒田「環遊日記（中）」301-303.
- ¹⁵³ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」319-320.
- ¹⁵⁴ 拙著『物語 近現代ギリシャの歴史』（中央公論新社、2012年），14-17.
- ¹⁵⁵ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」324-325.
- ¹⁵⁶ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」325-327.
- ¹⁵⁷ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」327.
- ¹⁵⁸ 伊東「希臘旅行茶話」610.
- ¹⁵⁹ 竹山「希臘にて」65.
- ¹⁶⁰ Richard Clogg, *A Concise History of Modern Greece*, 2nd edition (Cambridge and New York : Cambridge University Press, 2002), 77-115.
- ¹⁶¹ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」329-330.
- ¹⁶² 拙著『物語 近現代ギリシャの歴史』、70-109.

¹⁶³ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」332-333.

¹⁶⁴ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」345-346.

¹⁶⁵ 黒板「西遊二年欧米文明記（下）」346-347

¹⁶⁶ たとえば、弁護士・歴史家・外交官のマルコス・レニエリスは1841年に『ギリシアとは何か？ 東か西か』という論考を発表している。その中で、ギリシアは本質は西洋であるが、ビザンツ時代に東洋に変質を遂げたと主張している。Μάρκος Ρενιέρης «Τι είναι η Ελλάδα;», Ερανιστής, Φυλλάδιον Γ', Τομός Α' του Έτους Β'(1842): 189-215; Robert Shannan Peckham, *National Histories, Natural State: Nationalism and the Politics of Place in Greece* (London and New York : L.B. Tauris, 2001), 48. さらに、19世紀末から20世紀初めには、近代のギリシア人は、古代ギリシアからだけの文化的遺産を継承しているのではないとして、ビザンツ帝国（そしてオスマン帝国）の時代の歴史と文化の継承者としての「ロミイ（ローマ人）」概念の主張も民俗学者によってなされた。「ロミイの意識」は「ロミオシニ」と呼称され、民衆レベルで脈々と継承されているものとされた。ギリシアの外交官で民族主義者のイオン・ドラグミスとアサナシオス・スリオティス＝ニコライティスは、オスマン帝国崩壊後の東地中海に、多民族共生の「東方連邦」の建国を一時目指した。Ν.Γ.Πολίτης, *Έλληνες ή Ρωμιοι*. (Αθήνα, 1901); Νίκος Α. Βεής, «Ο Αργυρής Εφταλιώτης και η “Ιστορία της Ρωμοσύνης”», *Νέα Εστία*, τευχ.537 (15 Νοεμβρίου 1949), 1460-1464; Αλέξης Πολίτης, *Ρωμαντικά Χρόνια. Ιδεολογίες και Νοστορπίες στην Ελλάδα του 1830-1880* (Αθήνα, 1998); Gerasimos, Augustinos, *Consciousness and History: Nationalist Critics of Greek Society 1897-1914* (New York : Columbia University Press, 1977), 84-116. Thanos Veremis, “The Hellenic Kingdom and the Ottoman Greeks: The Experiment of the ‘Society of Constantinople’”, Dimitri Gondicas and Charles Issawi eds., *Ottoman Greeks in the Age of Nationalism* (Princeton, New Jersey : Princeton University Press, 1999), 181-191.

¹⁶⁷ 伊東「希臘旅行茶話」607.

¹⁶⁸ 伊東「希臘旅行茶話」609.

¹⁶⁹ 伊東「希臘旅行茶話」607.

¹⁷⁰ 安倍『藝術の國』14.

¹⁷¹ 安倍『藝術の國』71.

¹⁷² 安倍『藝術の國』95.

¹⁷³ 竹山「希臘にて」104-105.

¹⁷⁴ 竹山「希臘にて」44-45.

¹⁷⁵ 安倍『藝術の國』16.

¹⁷⁶ 安倍『藝術の國』29.

¹⁷⁷ 竹山「希臘にて」92-93.

¹⁷⁸ 湯川「アテネの集い」156.

¹⁷⁹ 湯川「アテネの集い」156.

¹⁸⁰ 村上春樹『遠い太鼓』（講談社文庫、1993年）292.

¹⁸¹ 村上は、単なる観光的旅行者ではなく、恒久的の生活者でもない自分と妻との立場をこのように呼んだ。村上『遠い太鼓』20.

¹⁸² 竹山「希臘にて」134-135.

¹⁸³ ヘーゲル（藤野渉、赤澤正敏訳）「法の哲学」『世界の名著35 ヘーゲル』（中央公論社、1967年）174.